

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年五月二十五日 印刷
昭和四十三年六月一日発行 (毎月一日発行)
(第三十三号)

川柳塔



No. 33

川柳 明治百年昭和篇

六月号

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

川 柳 塔 社 主 催

路 郎 先 生 三 周 忌 句 会

日 時 7月7日(日) 午後1時 開 場

会 場 光 明 寺 電話七七一―九二六〇番

(市電下寺町又はバス日本橋三丁目下車)

★下寺町からは南へ、日本橋三丁目からは東へ。

会 費 百五十円

司 会 西 尾 栗

開 会 の 辞 若 本 多 久 志

★才一部 故麻生路郎先生 三周忌法要 (一時半から)

説 挨 拶 中 島 生 々 庵
説 話 加 藤 龍 雄 師

★才二部 路郎忌句会 (二時から)

兼題「子」 菊 沢 小 松 園 選

「机」 清 水 白 柳 選

「引越し」 北 川 春 果 選

「人」 麻 生 霞 乃 選

席題(三題・当日選者と題を発表。各題三句以内)

閉 会 の 辞 川 村 好 郎

★才三部 晩 餐 会 (同会場で)

この会費は千円。お申し込みは二時。会場内で受けつけています。

★地方の方々にお会いできるのも先生のお引きあわせです。

母の忌に今年も同じ雨が降り
 頼ずりしてお別れ十七年前の今日
 母の忌にまだ詫び足らぬ灯を見つめ
 振り出しに戻り母の忌の血が凍り
 母の忌は帰省を兼ねて拝まれる

中島生々庵



今月のことば

四月十四日今年も京都の都をどりを見た。
 明治五年に始まり第九十六回目というから相
 当な歴史で大方の人は観賞を重ねていると思
 う。古い伝統の土地柄にふさわしい芸能を背
 景に成長するのは当然のことで本年も大変楽
 しいものであったが「首引」や「七福人」は
 特に惹かれた。ただ素直に言ってわれわれ大
 衆になじみ難い空虚さ、而もその空虚さが重
 荷にさえ感じられる雰囲気は何処からともな
 った。肌伝に伝わって来るのは惜しまれてならな
 かった。

例年の通りカネメにおいといなく苦心の跡
 も伺える演出振りで、豪華絢爛、優雅典麗と
 繰り展げられたのが「おおワンダフル」式の
 外人や「きれいな舞妓さんやったなあ」程度
 の観客層のめあてだけというのなら寂しい気
 もするというのである。
 古い皮袋に盛る新しい酒。そこが問題にな
 る。川柳の進むべき方向でいつも頭が二ばい
 の私は最後の幕が降りて暫らく目をつむった
 まま、立ち上がれなかった。

川柳塔六月号

川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

あめあめふれふれ……………戸田古方…(2)

川柳明治百年……………清水白柳…(24)

川柳初篇研究……………(六十)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………後藤梅志…(38)

豊臣秀吉……………(六)……………富士野鞍馬…(40)

大連柳人奇行録……………(大陸巷談)……………東野大八…(22)

白柳作品……………佐藤正敏…(64)

隠退か引退か……………直原七面山…(41)

私論・柳論

あめあめふれふれ

親爺は歩くとき物を持つのが大嫌い。倅は反対、物を持っておらぬと頼りなくてしょうがない。これはどうやら人間の種類が違うのかとも思うし、親の真似をしたがらないのは人間の通性かも知れないとも思う。

幼にして商いの道に入り、三十代に第一次大戦を経験して、大儲けをしたことが、死ぬまで忘れられず、夢よう一度と追い求め、しょっちゅう、前ばかり見る姿勢を崩すにも崩せなかった親爺。

その倅——私は親爺を助けられる年になってもゴーイング・マイ・ウェイ、才覚一つ出そうとしなかった親不孝な、気儘な、罰当たり。

雷がなれば腹がへるとか、台風が来そうになっても、風が吹くと涼しいとか瘦我慢を張る臍まがりもあった親爺。倅は素直に恐がるが、どうも、前向きに付合えそうにない。前向きが駄目だから、自然、横か、後ろから隙を覗いたがる。ひとの嫌がる、避けたがるようなことを漁っては自分をPR

痴 盲 録……………高 鷲 亜 鈍……………(19)

雅号ぶっちゃけばなし……………大 鶴 喜 由……………(53)

たましま大会余話……………本 田 恵 二 朗……………(53)

自 選 百 句……………石 倉 旅 風……………(42)

……………正 本 水 客……………(44)

近 作 柳 樽……………寺 田 花 宵……………(46)

……………若 本 多 久 志 選……………(30)

ブラジル川柳社に寄せる……………吉 田 水 車……………(59)

ち ょ っ と 一 筆……………小 川 静 観 堂……………(59)

初 歩 教 室……………菊 沢 小 松 園……………(48)

大 萬 川 柳「荷 札」……………清 水 白 柳 選……………(52)

★ 柳 界 展 望……………(薫 風)……………(54)

★ 本 社 五 月 句 会……………(庸 佑)……………(56)

★ 各 地 柳 壇……………(文 秋)……………(60)

一 路 集 「愛 称」……………野 村 岬 月 選……………(50)

……………「こーヒー」……………林 葵 丘 選……………(50)

……………「伝 説」……………越 智 一 水 選……………(51)

★ 編 集 後 記……………(白 柳・一三夫)……………(65)

その一つに、若い癖に、若い時からステッキを突くのが好きだった。その頃から肥っていたので、体重を支えるもう一本の足だとはざき、戦後には、度重なる停電で電車が止まると歩かんならんと口実を付け加える。そのあとが傘である。

私は傘を持っている。だのにあの人は傘を持たずに濡れている。ざまを見ろ、傘を持つて、ほんのちよつとしたことじゃないか。裏むけに歩いてごろうじろ、人生はこんな楽しいのにと悦に入りがる。今だに治らない私の病気である。名付けて「偉いんだ病」やっぱり、どっか親譲りの瘦我慢があるのかも知れない。

傘を持つて歩いてみると、雨がいつ降ってきてても、それこそ「あめあめふれふれ」である。

こまつた恥以上である。川柳がこんな私を支えて呉れているとも、川柳がこんな生き方をさせるのかとも思う。

冥土とやらで、路郎先生と親爺が、俺に似よ俺に似るなと子を思いうを口ずさみながら、ニタニタ下界を見てござるのを感じる。

(戸田古方)



中島生々庵選

倉敷市 本田 恵 二朗

過去が過去だから自分をだいいじがり

活けられているとも知らず咲きほこる

貫録があるとは本人意識せず

金持たぬ安心感が眠りこけ

予定通り負けましたよと負け惜しみ

倉敷市 野田 素身 郎

うららかな日曜誰もきてくれな

横顔がどこか似ていて乗りすごし

のどかそうにみえる親子に金がない

閑職についてたばこをまたはじめ

掛軸をほめまだ帰る気配なし

青森市 工 藤 甲 吉

消えて去る後姿を見まいとす

三本の矢が集まらずおちぶれる

しゃべらせておけばいっぱし評論家

轢かれましたと苦笑して松葉杖

男なしではやはりと女言いました

岸和田市 内藤 きさ子

病よしほうれん草の掃除する

タンポポを踏んで測量団が去に

春雷が桜を犯すにくらしさ

艶のない靴へ世帯がのしかかり

春うららたのしそうなる坐り込み

高槻市 傍 島 静 馬

目の正月云うてた妻にねだられる

空巢よけにババアをおいて行く花見

そうそうは馬にもなれぬ子沢山

ふたありになつて見直す老妻の良さ
ご利益は金刀比羅さんで見たヌード

大阪市 後藤梅志

手を引いて分かる子供に水溜り

ながや火事(四句)

畳の上ではなしができる人の運

風呂敷の中で位牌の首がとれ

切り替えのつかぬあたままで焼け残り

焼けどまりぶじな顔だけ見てもらい

豊中市 戸田古方

夫婦旅行(五句)

朝市の値札にふれる女の眼

旅の味小出しに話す台所

薄陽から本陽になって旅ごころ

各停のこんどは老婆の皺を読む

昼ぬきの湯治がこれでもう三日

大阪市 大坂形水

夜桜の出入風情にほど遠し

コーヒだけ取って商談するロビー

当然の品代払うに恩を着せ

留守番へ話し相手が来合わせる

目離しができぬ豆靴馳り出し

ハワイ 羽佐間柳葉
金蓄めりや目先の利いた人にされ

憎まれもせぬ人頼りにならぬ人

見合いなど古いと世代野合する

本家よりハワイに明治の香が残り

口癖に多忙託ちて遊んでる

岡山県 浜田久米雄

事故で死ぬ数を平気で聞いており

車買う話となりで聞いて来る

ご時勢について行く気でニュース聞く

さてこれが古墳か石を積み重ね

総入れ歯探せば枕許にあり

大阪市 正本水客

四男市大合格

友達が出たり這入ったりして楽し

賀名生梅林(吉野)

お帰りにどうぞ物売る人の人馴れず

散りしく梅を座ぶとんで払うぜいたく

落ち椿 天誅組の息吹して

余部鉄橋(山陰)

山ざくら見る人もなき崖でよし

大阪市 金井文秋

おかしさをおさえて孫の歌を聞き

退職金野心おこすに少な過ぎ

たまさかの旅はがめつく見て回り

これと云う欠点がない甲斐性なし

なりふりを捨てても生きる道えらび

大阪市 本多柳志

告別式くすねた指で香をくべ

団らのリズムを乱す電話ベル

四月馬鹿騙され易い花名刺

賢兄の面子愚弟の金で立て

四恩かみしめれば入れ歯きしむなり

大阪市 不二田一三夫

ベトナムの和平恨んで倒産し

寄席（四句）

古典では食えずアングラで荒らかせき

奇人出ず小粒になった芸わびし

タレントといえは出世をしたつもり

美談とは師の未亡人とコンビ組み

熊本市 楠田英子

悩みなど吹きとべ春の風だもの

ねむってる妻子ハンドルもつ夫

花の風熊本城の派手に見え

陽のあたる場所でなかった草が伸び

高槻市 若柳潮花

柳の芽女の肩の合ショール

和服着て逢えばつま先から見上げ

意地だけが残る生活へ疲れて来

春雷へ茶席の庭の雪柳

岡山市 服部十九平

塞翁の馬だと悲運にファイト湧く

頂上の一本松にある悩み

核アレルギー花見客へもピラを撒き

汚職拡大去年の歳暮気にかかり

大阪市 福井野迷路

逃げた猿檻が嫌だと言えぬだけ

しふしふの往診花咲き誇り

まあええわ心に言うてそれで済み

み言葉

おきな児の心になれと宣えど

兵庫県 河原みのる

病人の散葉だけでせいがなし

レース編む妖しきリズム蜘蛛に似て

湊川神社にて（二句）

楠の木の一ト葉をそっと匂いでみ

十たび目を生きて在する頃ならん

兵庫県 遠山可住

ほほ骨にひげ剃り残しようしやべる

心配が父と母とでくいちがい

女子寮に感傷用の月が照る

横向いてみたが俺には俺の道

芦屋市 丸川初甫

はっきりと云えぬプランのハネムーン

新歌舞伎座「曾根崎心中」

今生の別れにお初白う塗り

新歌舞伎座「義経千本桜」

お里もう女房気取りの釣瓶ずし

原田神社献花祭

献花祭文へ仙台平の音

竹原市 小島蘭幸

君と一緒に初めて手相見てもらい

ウエディングドレス見つめていた二人

学歴を気にしてたのと笑てくれ

あねいもとどちらも恋をして平和

笠岡市 松本忠三

真先きに課長が飛び出す震度3

買収を待って田んぼに草が生え

百姓に嫁が来たのを不思議がり
タクシーをやっと拾えばバスが来る

大阪市 橘高薫風

笛吹き童子恋ならなくなにならなくなに

仏像を恋うるがごとき恋となり

朱の鳥居恋愛道の入口か

秋吉台 石の饒舌 雲の黙

倉敷市 水粉千翁

散り際を覚悟の蕾ふくらませ

言訳の出来る故郷の坂を越え

寝押しして少女は何を企らめる

まごころを道連れにして届けられ

宝塚市 中村ゆきを

賃上げの時は一致し団結し

世界は二人の為にとはちと勝手

三列乗車厚顔無恥が四列にし

雨降って固まる話ともみえず

京都市 松川杜的

賀名生梅林

梅林を外れて庵寺の落椿

里土産並べて峠の姉弟

飛鳥路を歩く

ハメコミ地蔵すっぱ抜けてるのが一つ

文珠院古墳

玄室の此処まで花の風が来る

銀婚式うちの女房に髭があり

叱られてあまえて母校とはなりぬ

闘病の指にふれさす春の土

老いらくの恋なとしなはれ春の風

桜井市 岩本雀踊子

岡山県 藤原秋月

四面楚歌我が影だけは付いて来る

この時とばかりに叱言の多い事

焼香の手つきを遺影見て笑ひ

瘦瓶（しびん）に花を活けてみたとして瘦瓶です

富田林市 川端東雲楼

花のがし葉桜にたつおぼろ月

三回忌来ても表札そのまんま

兄弟は背のびしいしいたけくらべ

井戸端のタオル銘々好きな色

鳥取市 河村日満

義兄の死

大往生の顔寝てる如髪を剃る

父母の年忌祭にて（三句）

写真でもあればと母を見せたがり

会者定離顔も知らぬはひどすぎる

父を悪母を菩薩とおもう日や

奈良県 草深醉升

友の茶室竣工を祝し（二句）

生駒山見越に眺め茶の香り

買うとけばよかった度胸も金も無く

通勤に花見の出来る佗び住居

貰い水つくづく水の有り難さ

笠岡市 木山遠二

嫁よりも朝寝するよう心がけ

かく老いてかく童心を失わず

血圧は高し悠々自適の身

日曜を待たず桜の散急ぐ

宇部市 平田実男

香具師の目へ僕も一羽の鴨に見え

兄さんと呼ばれる恋ではかどらず

進学の顔で予備校帰省する

人間国宝職場へひっそりかんと居る

大阪市 山川阿茶

冬オーバ着て夏帽の品さだめ

金魚掬い楠の若葉が屋根になり

始球式キャッチの頭越す拍手

狛犬がくしゃみしそうな花吹雪

大阪市 西 出一 栄

日溜りへ一人来二人来養老院

やわらかな陽射しへおしめ解いてやり

添わしても根じめの花はあっち向き

スモッグに挑戦をする鼻毛のび

奈良市 村 上 春 巳

早よ嫁をもらえと晩婚だった叔父

今年また雨に降られた吉野山

大鐘へ尺貫法のガイド聞く

能面へかがり火幽玄の影作る

泉大津市 高 津 徹 也

児童画の唯ひたすらのタッチなり

いつもより話も軽く七分酔い

エプロンのかいがいしさよ春や春

よそ行きの顔を忘れて帰宅する

岡山県 大 森 娛 句 楽

デモ隊の戦さゴッコを子等で組み

余命ない心託しに高野山

気まぐれに就職をした定年期

春雨に泊められる気で飲みつづれ

神戸市 仲 どんたく

あべ川と格闘をする総入歯

もう十年生きねばならぬ一万歩

乗り越したことにして飲む駅で下り

乙女のまま逝きし姿の落ち椿

大阪府 早 川 清 生

抒情とは過ぎゆくものの背に拍手

よい景色遍路どうしは話し好き

取沙汰や寺に盲の子が生まれ

よい男だったと聞込み聞いてくる

兵庫県 大 江 秋 月

多数決の原理が明治氣にいらず

明治百年若さが明治批判する

辞退したポスト惜しがる妻のぐち

とっておきの顔を見合いに見てもらい

新居浜市 小 林 孝 正

神の攝理信じて嘘の世を生きる

胎動へ女汗して生きはじめ

心まで病むまい松葉杖をつく

朝顔の浮気隣の屋根で咲き

室戸市 奴 田 原 紅 雨

サンマの背へ焼酎を酌ぎこぼし

夕やけこやけ後添を貰わんか
散り急ぐさくらの下の宴かな
花びらを受ける掌ならばよし

明石市 阿 万 万 的

桂離宮を訪ねて

松琴亭に音あり池の水も揺れ
桂垣京のしめりの色となり

笑意軒もう春が来た田へつづく
沓脱のまるみを素手でなせて見る

鳥取市 藤 本 礎 山

七円がまた支払いをのばしに来
実印をあれだけ捺させられっぱち
子が三人巢立って苦勞まだ続き
蔭でどう言われてもよし妻と旅

下関市 中 村 九 呂 平

お迎えを待つ念仏が葉吞む
能書きを読みくらべてる置き葉
お隣に負けてなるかと百合の丈
雀来ぬ今朝を淋みしく床を出る

東大阪市 久 米 奈 良 子

迷路にも春の兆の城下町
向い風押して女のひとり旅

手負いしてなおひたむきに恋衣
客ずれのせぬ芸人へ夢をもち

倉吉市 奥 谷 弘 朗

じっとしていて貫禄がものを言う
女房に内緒の金も要らぬ老
見て歩くだけの花見でもの足らず
輪動は無いが十年同じ椅子

守口市 村 田 瓢 太

のぞかれて新聞小さく折って読み
片足入ればもうしめたもの満員車
方角音痴になって地下街ウロウロし
人の世の盛衰よそに河流る

大阪市 石 倉 旅 風

届かぬと知っていながらする背延び
嗜みしめてみよと裸のするめいか
押せとあるドアなら引いてみて這入り
三日咲く花をいたわる朧月

大阪市 吉 岡 美 房

倅せをつかむかたちの髪にする
自白まであと一息の呼吸読む
もう嘘はないと被疑者の瞳澄む
留置場兎のような目に合合い

平田市 久家代仕男

一日を運勢欄の通り生き

釣れずとも春の陽を吸う岩に座し

綺麗ごとならべ自腹の破目となり

わさびほど効かぬが取柄みとめられ

笠岡市 木山要次

どうにでもとれる言葉の云いのがれ

まだ涙まつ毛に残る美しさ

脳みそが少し足りないだけのこと

もう五分寝させてやれと春の朝

枚方市 宮川珠笑

川ぞこの平和乱しに網が来る

張り替えたふすまへ子らの筆が冴え

射位に立ち的に迷いをみつめられ

アパートに包囲されてる荒れた墓地

門真市 福島鉄児

引受けてえらいこっちゃなと気付き

あきらめているのに水を差しに来る

地下街を出れば篠つく雨に逢い

受話器手にさてこの不始末をどう話そ

大阪市 木村水洞

春くれば不平云わずに桜咲き

植木市ひやかすほどの暖かさ
子沢山倦怠期など云うとれず

四国巡拝上期

本当のお遍路さんはよく歩き

竹原市 山内静水

まわりくどくその一事が云えません

世間もう子供同士と見てくれず

力だ錢だどちらも俺にない

予想屋に謝礼をもらう程に凝り

島根県 藤井明朗

化粧へ女なにもかも忘れて鏡

貧しさに良心疑の目で見られ

花の土手人出に押され散りかかり

花を押しのけ若芽はじき出る

香川県 三井醉夢

久々の上京(二句)

江戸っ子のさっさつと歩の早し

ホテルオークラ日本人の小さいこと

吾妻徳穂師匠宅(二句)

盃を受ける娘の手のふるえ

一生をおどりにかけたあでやかさ

倉敷市 小幡里風

遠来の友がつついた過去の傷

有頂天その時悪魔が爪を研ぎ

大の字でふくらむ野望あたためる
すり硝子げに素晴らしいシルエット

大阪市 碑 弓彦

使い道分らん物が送って来
式挙げてしまえばなんとかなるだろう
見栄捨ててしまへば無理のないこの世

豊中市 寺田花宵

友情に宗旨がもとのひびが入り
一本のピン見当らぬ四畳半

抽出しを整理さす気の雨つづき

鳥取県 森田布堂

税務署の屋根も見えてる花の宴
鯉のぼりみな風向きに素直なり
かげろうの中に保線の唄があり

大阪市 室谷鉄舟

妻は五十一筋縄でいかぬなり
よく禿げて来たので帽子手離せず
悪口を云えば居眠り細目開け

堺市 青野遊仙

デスマスクかと思わせる化粧ふえ

持物が良過ぎて人柄悪う見え

懺懃無礼空からのコマーションナル

呉市 林野甍光

コンタクトレンズの底で睨られる

今晚はおいでる勘をピタリ当て

バス停に小首かしげて一人いる

大阪市 河井庸佑

栄転と左遷同じ列車に乗り合わせ

三日目に家が恋しくなる旅行

一人旅今夜のプラン考える

出雲市 野村岬月

ドン行をのんびり待たす花の駅

カッコイイ話家計簿は泣いており

免状と大分違っているお花

鳥取県 清水一保

つばみまだ堅し地球に春遠し

だからとて野党に国政まかされず

我が人気妻は外から聞いて来る

宝塚市 小島無聖

散るときに散って落花の美しく

おい飲みとドス突きつけるように酔い

夜桜の灯にわが影も春と浮き

大阪市 中川滋雀

散ってなお花の名所の稼ぎ高
聞き耳をたててそ知らぬ背を向ける
旅の夜のスリルを胸に温める

愛媛県 村上旭童

山の春のせて各駅停車つき
苗植えておけばなんとかなるときめ
百円の酒でねているのも男

倉敷市 臼井三林坊

ツケの利く店までという久し振り
僕の方ばかり見ている試験官
気の合う隣りへ分ける花の苗

奈良市 宮口笛生

一升で足らぬ二人に街更ける
アルサロを最後に終電までの刻
飲み直そ飲み直そうと酔うている

出雲市 尼緑之助

どっと咲く花へ苛烈な砂ほこり
夜桜に与謝野晶子がふと浮かび
吉日の化粧素直に人任せ

京都府 大鶴喜由

十七字書かぬところを酌みとらせ

老いは泣き若さは笑う人情劇

産むために食うにわとりの器械めき

岡山県 直原七面山

美人を張って恋の駈引

妖婦か知らねど僕には天使

泊る覚悟の女しゃべらず

諫早市 川岡靈眼子

地球にもこんな重さがある仏

病みあがり女にはないのどほとけ

つけ払いに行つてそれ以上借飲みし

愛媛県 渡辺曉童

やめるにも辞令いただく公務員

テレビより雀が朝にしてくれる

執行猶予位いの悪事しかやれず

今治市 越智一水

夜と昼児はまちがえてよく育ち

初対面ものを食うからふとほぐれ

河童天国たらいを漕いで民話めき

熊本県 有働芳仙

春の宵握り返した手の温み

踏まれてもいい春斗の靴で出る

気づかれぬように君を愛す夜光虫

倉敷市 木村 千容

凡人の凡つみ重ねつみかさね
年輪の意識ごとと深みゆく
貧灯を守りつづけた皺としみ

藤井寺市 西 いわを

馬鹿になり切ろうと努めてる
見覚えのある人が佇つ柳の樹
今日は明日の為にある句を作る

伊丹市 小川 静観堂

大君の辺にこそ死なめが七十九
なんにでもよう利いた明治の重苦水
花冷えの道をとぼとぼ友は近く

下関市 桜川 不水

亜純さん・堀江さんを憶う(二句)
盲目の涙は絹の布で拭こ
盲目の何かを求むしばたたき

流石女房掘り出して来た特価品

名古屋市 吉田 水車

今泣いた校門を出る晴れ衣裳
慶長小判思いのほかにけちな音

ジョンソン米大統領ベトナム戦へ断
和平への道せめてもの置き土産

大阪市 児島与呂志

今もめていま台所で母と娘と
結局は悪もんに成る父でした
高速谷四駅にて

大阪府 西川 誓二

天主閣公害の空を苦笑い
ご利益があると信じてあげる寄附
お芝居をはめて見合の場所とする

豊中市 米虫 一乃字

お銚子のように牛乳膳にのせ
酒と言う悪魔ペラペラ喋らせる
犬を追う時は奥様国訛り

岡山市 田村 藤波

散り急ぐ桜に追い打ちかけた雨
何を考えトボトボ歩く遍路さん
花見客の怪我一号として記事になり

小松市 関戸 宗太郎

初任給で背広片そでだけ払い
窓へ紙貼って新婚気をもませ
復職を妻が安じる今朝の冷え

鳥取県 森本 法泉水

妻七年振りに退院す

退院の荷にシャボテンの鉢も添え
退院を迎える障子張り替える

壁のしみ七年前の壁しみ

大阪市

天正千梢

遠き国恋うるか象の鼻ふりやまず
波長合わし其の逆転を待つおろか
名案はほつる髪をときながら

小松市

馬場魚山

連絡はメモ帳でする共稼ぎ
ストーブを弱に燃して春近し
旅行する度アルバムを埋めてゆき

鹿児島市

土岐トク子

傷心の我れに噴煙あたたかく
友情が招く桜の花だより
棹いっぱい干してみあぐる小さき幸

倉敷市

川端柳子

も一人が面倒居らねば物足りず
愚痴を云う人には愚痴の種が出来
よい事もあるうよい事待ちわびる

高石市

谷沢好祐

親馬鹿とボスが作ったPTA

合格の今日のピアノの弾む音

信仰のお水も飲んですがるとき

倉敷市

井上旭峯

ハツ当りあとの空虚を風が抜け
爪を切るまだまだ生きる欲があり
やりましよう貰いましようの荷が軽い

富田林市

岩田美代

痛いところけば痛いところ居直る気
嫌いになる自信ないから怖くなり
山と山重り合うて緑蒸す

和歌山市

二越俊爾

保険屋は火事の近所で鉢合せ
老いて子に従い兼ねる朝のパン
指定席離れて居たらはっとかれ

和歌山市

西尾公作

姉婿を好きとは言えず家出をし
出て行けと言うてまともに家出され
デモ出来る人うらやまし日稼す

大阪市

本庄金三

役付きの辞令出てから威張りだし
はしか未だせぬ美人を妻にもち
指ぬきを探す老母の目が達者

堺市 新谷笑痴

身障のハンディ見事な筆の冴え

姫路市 隠岐不酔

許すとは云わず産衣の来る改郷

香水に男ゆっくりだまされる

和歌山市 土谷城石

けちんぼが酔潰れてる祝儀酒

家出をも残さず乗せて終列車

ぼつぼつと花や線香で恩がえし

堺市 高橋千万子

裏口を幼稚園から教えられ

知らん顔約束出来た足と足

傘かりず相合傘のにくらしさ

大阪市 宮尾あいき

猫に恋あきらめさす氣の魚買い

堀の内沈丁花ありと云う薫り

満開の造花へ桜ちりかかり

大阪市 川口弘生

四十三才誕生日

老眼鏡まだ要らぬかとおどかされ

水晶婚に際して

おねだりは銀婚式までとっておき

伯父古結真直三回忌

乳のみ児が早や合掌する三回忌

出し雑魚になろう覚悟で役を受け

一生を狂言の足で満足し

人生行路雨にあい風にあい

八代市 永松道雄

古墳群日本文化の鍵を秘め

奥様は魔女だと悪友寄りつかず

独身で暮す氣になる不倖

ホノルル 加川カロ

足音をきき分け猫はさつとにげ

特売場女の本性ここにあり

厚化粧すればする程老目立ち

香川県 岡田拳法

幕末の志士も不逞の徒でありき

退院が近づき注射痛くなり

三月二十日退院して

幸福は子が胸に背に飛びつくよ

大阪市 今西章雅

啓蟄と言うのに地下の街勤め

しゃっくりが止らぬすねてるのではない

静電気合織の裾まといつき

京都市 都倉求女

物干しも浮いてるような春の風

夕桜水もひたひた去り難し

春や春犬も思いつきり寝そべって

言訳は眼鏡の玉を拭きながら

新婚も旧婚も同じ宿浴衣

ピンポンに宿のどてらの袖が邪魔

松江市 柳楽鶴丸

美容によいと云えば何んでも喰う女

神様のいじわると叫んで見たい日も

プロポーズ夜桜の綺麗な夜でした

守口市 羽原静歩

滝壺の虹へシャッターとまどえる

幾山河越えてベレーの人生譜

かたつむり空の青さへ匂うている

高槻市 山田季賛

へそくりが出来たとフト妻もらし

判なしで来た市役所で叱かられる

アベックをまともににらむ仁王様

岸和田市 葛城伊三郎

此の処さっぱりですわと銭を読み

粕に酔うた妻卷舌でからんて来

惜しい顔してフラットさん引さがり

和歌山市 垂井葵水

牡丹雪仔犬からかいながら消え

割箸を割らぬ酒豪と隣りけり

行く末を彫らにゃよかった赤信女

ハワイ 上田紅溪

落葉踏む足音ばかり山静か

食べるのを控え目にして長う生き

岡山県 池田古心

街と云うわずらわしさへうごめく人

横着の見本が寝煙草又焦がし

岡山県 横山一声

青になり渡ってダンプにはねられる

うれしいニュースは四月馬鹿だった

大阪市 宮地双楽

名園に調和のとれた石の位置

出張も夜汽車に慣れて宿かせぎ

出雲市 原独仙

満開でなければ酔えぬわけでなし

巧妙な手口で掬って空財布

松江市 岡崎祥月

七転八起やっぱり運不運

シャッターが半分にする顔の中

加賀市 細呂木魯木

明日の夢すてて今日に生きるだけ
春遅々と煎じ薬は湯氣を立て

京都府 清水谷 句楽坊

伊豆大島に旅して

溶岩の砂漠憤火を願想し

馬で行く旅の情緒を三原山

泉佐野市 大工 睦夫

もめ事の和解が出来て腹が減り

地べた這うよもぎ凜々しく春告げる

★ 菊沢小松園

猫柳根のない枝と知らず伸び

二日酔うつらうつらと愚痴を聞き

土掘ればこんなところにも春があり

つつかれて亀忍従の眼をつむり

春立つや女粧うことに慣れ

清水白柳

ひとり来て静かな桜の下を揺る

労資協調して公害の煙出す

蠅の真似して拌んでるお人好し

てれくさく哄笑をして起き上り

食えるだけで満足とはいじらしい

川村好郎

松江梅里逝去一周年

一年祭喜んでほしいことばかり

せめてものしみじみ話し合う墓前

これからだ川柳塔へも天翔けれ

西尾 栞

世間って狭い話にマダムも仲間入り

パレットの方が画になってる面白さ

義理でゆく会葬すごい土砂降り

桜堤臨時の駅のあるところ

燕とぶ港の街の旅袍

北川 春巢

草が萌えだした青空駐車場

なるようになるさと慰めてるつもり

内科学会出張（東京）

風の強さまで東京に感心し

長宗白鬼氏に会う

十五年ぶり小説のように会い

三男大学入学（長崎）

九州の天気それから気にかかり

若本 多久志

燃え切った老骨という身を横たえ

年寄り来るところでなし純喫茶

無欲になったなあと古稀近し

この人も洒落が解って飲み仲間
嫁に好かれようと老妻哀れなり

痴盲録

高 鷲 亜 鈍

電話ベル壁をへだてて聞くころね
行水がしたいと厄介者が乞い

心気すましていっきよに書く色紙
くもの巣だらけになればなれ
催眠術で神さんだしてくれ
どえらい人なら奇蹟も起きよう
疑いの解けないままに手を合し
ああ光りをと叫んで死んだ人はだれ
芯とりそこね面砲はおこる

台風がわが疵跡を舐めつくし
種のない葡萄として好きになり
黒いという不吉にきょうも挑むのみ
くらやみに神か悪魔か手を伸べる
景も静物もみな反古となり
大巨ならず送り迎えにペコペコしてる
冲天の月は白旗かかけてる

大阪市 橋 本 緑 雨

大洲市 米 沢 暁 明

手みやげが悼やみになってもて余し
きずつけるなと念に念押し

須坂市 高 峰 柳 児

野次馬がどいたどいたと邪魔をする
日本中知られた甲子園の雨
持っている方が調停分がわるい

今治市 月 原 宵 明

そばする音をとがめて飲み足らず
通らない理屈を補聴器くり返えし
野良犬につながれている犬吠えられる
おみくじの吉へ参道いい歩巾

小松市 山 上 千 太 郎

石とればもやしの如く芽の力
ヒット曲人を馬鹿にしてる唄
横ちびの靴人間の敗者はく
こめかみの動きが止まる記事があり

和歌山市 秋 月 宏 方

小包の紐まで送ったままで着き
乱雑な机に座る気をそがれ
言わでものこと酒こぼしつしやべる

今治市 長 野 文 庫

釣り上げた魚にも似てる妻をつれ
式も初夜も明けて人生今日は
いくなれば神さますごい大地主

名古屋市 長 谷 川 鮮 山

真面目さを嫌われ二次会にはまかれ
今だから云うがと死んだ人へ鞭
次があるから折れて出る小あきんど

麻雀にうつつ抜かして胃を痛め
考えてほしい不満をぶちまける

川傍柳 初篇研究

(六十)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

488 とんだ御亭主と子の膳先キへすへ

眠狐

川端|| 昼見世であろう。昼見世は昼過ぎから暮れ近くまで、格子に見世を張って客を待つもので、子を預けた父親がなかなか帰ってこないで、子供の食事を出した意であろう。夫婦なら御亭主と他人行儀な言葉は使わない筈である。

高須|| 夫が飯時になっても帰らないので、まず子の飯を出してやる母親(妻)をいった句で「とんだ御亭主」とは、自分の亭主を、子供の前でそう言ったのである。

御飯よりまんまの膳を先へ出し 安永清|| 御亭主は居酒屋で一杯ひっかけているところか。

藤井|| 高須説替。今でも「うちのお父ちゃんもしようがないね」とぶつぶつ言っていて子供に食わせ、自分は空腹で時計をにらめて

いる。「子の膳先へすへ」で自分は空腹でとりたい。

丸|| 「とんだ御亭主」とは自分の亭主をいったのではなく、子供をいったものと解する。腹をすかして「ごはん、ごはん」と急き立てられ、仕方なく亭主の膳より先に子の膳をすえる。その場合の母親の親愛のこもった洒落。高須氏引用の句と全く同想。

岡田|| 御亭主が「おい、早く飯をくんな」というと女房が、「まあ大人のお前さんがなんだね。子供が腹を空かして、さっきからせつついているんだよ」と、子供の膳を先にすえる母親の情。

高須|| 蹴マリから吉原へ行く句である。行く可し、行く可しは、そういう連中の好んで使った漢学言葉で、「行こう、行こう」と同意義である。本篇にあった「是が一徳

と四人り出来心」「むらさき裾濃ぬぎ捨て

て女郎買」と同じく、マリゲツを脱ぎ放して、さあ行こうと気おいこんでいる若者達の姿がホウフツとする。

藤井|| 高須説の如く行くべし／＼でこの若者達のエリート意識を感じる。同感。

丸|| 贊。「行くべし／＼」が句のヤマであるが頂きかねる。

岡田|| 同。

490 持もつて来てとゆすぶる松の枝

竜巴

高須|| 「持ち持って」と読むのであろうがこういう使い方を知らぬ。三面子先生は「大夫の蔭の禿・新造ら」と言っているが、台の物の松の枝をかよく判らぬ。

前田|| 「持ち持って」と読む。台の物に間違いないし、新造や禿の匂いがする。

清|| 「きのじ屋の松野に禿よりかゝり」(五

・26) という句もあるが、主題句も台の物と禿を詠んだ句であろう。

藤井「ゆすぶる」で小供っぽいだった子振りが出ている。やはり禿だろう。台の物の数が大夫の誉になるから、大夫に忠勤顔の禿ではなからうか。従って三面子先生の説をとりた。

丸「持もって来て」は「行き行きて」などと同じく動作の継続を表わすもので、ずっと持って来ての意と思う。用例は他に見付からぬ。出入りの仕事師などが門松などを持って来て、長くかついで来たため、ふりの悪くなつた枝ぶりなどを直しているところかと思うが、決定しかねる。

岡田「どうもハッキリしない句だが、丸先生の解が妥当と思う。「持ち持って来て」は永く持つて来て、すなわち遠路を運んで来ての意。

491 戻りにハ淋しく歩行車引 龜遊

高須「歩行」はアルクと読む。行きは人を乗せて行くからいいが、戻りは空車なので、急ぐこともなく「ホイホイ」とも言えず「淋しく歩く」と言ったのであろう。

前田「車引は車力ともいう。車で物を運搬する男で、かけ声にまかせて通行の女たちをからかったり毒舌ぶったりしていやがられた。二人三人四人と組をつくっていた。行

きにはおしゃべりもし、いせいのよかったが、戻りには空車の上、つかれて淋しくある車引との意。

車引女を見るといきみ出し
車引話をするにふしをつけ
しやべるのがきらひな車力のをとを押し
初・27
三〇・11
四八・29

岡崎「賛」「帰りにひっそりとする車引き(七〇・31)

清「賛」「うはごとが止むと車も軽くなり」(安九義二)

藤井「つまらぬ句。
丸「賛。車引の生能から見ると「淋しく歩く」が利いている。つまらぬ句とは思われぬ。

岡田「当時の人には車引の悪口を聞きなれているから、黙って歩く車引きが淋しく見えたので、案外その時分の人に実感のあつた句。風俗的に見ても、つまらぬ句ではない。

492 くだれるやうに花嫁脈をみせ 一甫

高須「羞恥心あふれる花嫁の姿態——脈をとられる腕だけ遠く伸ばして、身体は「く」の字に、顔はあらぬ方に向け、いたたまれぬ風情——佳句。

花嫁はその頃という病い也 一三・19

花嫁は考えもなく顔を塗り
花嫁は飯を数へるように食ひ
花嫁の目にかゝる暑い事
二二・22
九・29
一一・15

花嫁に六七人で所望する
花嫁は湯屋で聞きたい事を聞き
など、花嫁の句には佳句が多い。
傍三・40
桜・4

岡崎「賛。花嫁の自然の姿態を描いて、真情に触れている。

清「口説く」という言葉は現代の使用法とはちがって、江戸時代ではもっと直接的、積極的な意味をもっていたから、そういう意味において、花嫁の羞恥心が強調されている。

丸「諸説賛。
岡田「腕を長くのばすのではなく、ちよつと袖口から出すのであろう。

若本多久志川柳句集

「老いの坂」

柳歴四十数年の著者が世に問う巨篇。
序文、中島生々庵主幹。 B6版美本
実費四五〇円 送料七〇円

若本多久志著・川柳句集

★「親ごころ子心」

実費二〇〇円 送料六五円
申込所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔 社あて

大連柳人奇行録

東野大八

大陸川柳人同窓会のメンバーの中には、いろいろと毛色の変わったサムライが多い。今日は、そういった連中の中から、一きわ柳味横溢のエピソードの主をとりあげてみた。

まず、大陸川柳人のメッカだった大連から初めよう。戦前もはるかな、昭和初期ごろの大連といえば、酒と女がてんこ盛りになっているような柳暗花明の巷が、至るところに独自のフワカマードをひけらかして展在していた。何分、満洲大陸の玄関口だし、日本調植民地の、奔放活達な気風が、世界の一等国民の鼻の高さが頭のてっぺんに眼玉をつけていて九十九年租借とてわが神州の国領だと、昼間から酒席に芸妓数多を侍らし、黒田節などくそくらえ、張作霖とカイゼルを呼んでハダカ踊りをさせる。かくて天下国家を論じての果ては、万里の長城で小便すれば、ゴビの砂漠で虹が立つ、そうだったあと始皇取取りで巫山雲雨の末摘花でヤ二下がるという寸

法だった。

大陸川柳会も草分けごろの例会は、まずはこういう背景や舞台やらで行なわれたのが常だったらしい。したがって川柳会だというと、まるでお祭りの宴席でも行くように、下帯をはきかえ散髪をし、新しい足袋に新品の雪駄を下ろして出かけたものだ。こんな調子なので、句会で苦吟する奴はバカで、軽口ダジャレを飛ばす奴が勝ち。伝統も革新も、宴席の年増と新店の妓を並べた具合に雅味さえてたというのだから、まことにオーヨいなものだ。したがって柳号まで丸、太なんていう芸妓から拝借したのをつけて、ひげもじゃ、ちんくしゃの不粋な顔が得意満面だった。

当時の大連のさる柳誌に、小園菊子という女流の作品が若手の人気をさらっていた。今でいう官能的肉体派で、おいろけが十七字から滴りおちてかげろうが立つほど。それにい

かれて血の気の多いのがラヴレターまで書いたという。ところが某日、さる句会で、彼女が出席するというので、大騒ぎになり、わんさと若手が詰めかけた。ところが待てどくらせど一向にそれらしき佳人の姿がみえないうざわつく一座がどうやらしびれを切らすころおい、正面床の間にノホホンと座っている通称ヒゲダルマで知られるいとむけつけき老柳人の滋賀蕃十が、

「菊ちゃんは来ないよ」

とアッサリいってオホンと一つセキ払いして「来ないはずじゃ、小園菊子とは何を隠そう、このわしだ」

当時の大連の芸妓は、今の新聞一頁大の檢番番付にびっしり押し並ぶほどいた。毎日それが旦那衆に回わってくるが、ハリでついたアナのあるのはお座敷がついてる印で、それが五つあると旦那がついていてダメだの証拠だった。当時の檢番芸妓は、俗に白ギップといって、ちよいと旅しても一等に乘る。三等が赤札のころで、その名が出た。大した偉風だった。

ある日、天津の和田黙然人が来連したというので、某所でささやかな歓迎句会を張った。ところが、それが果てたとたん、黙然人がこんどは私の当番ですと、案内したのが大連名うての料亭で、座敷へ入るなりぞろぞろつんながってきた一同、思わずアッと息をの

んだ。なんとその座敷には、わき膳、向こう膳つきの結構な料理膳に、一つ膳毎に白ギツプ芸妓がニツコリと一人ずつついていた。

星星とまたたきあっている（黙然人）

「この句をみて中西若蛙がブ然としてこんな句じゃねえ、と苦虫をかみ潰したような顔でいう。すると、いや、名句であるといったのが佐々木三福で、この二人はよく川柳で飲み勘定のカケをやったもんです」と語るのが中野柳陽である。

若蛙といえ、当時非詩派の闊將と自他ともに許す青竜刀の好朋友（ハオボンユウ）で、詩派が毛虫より大キライ。ところが、井上颯花坊が来連したとき、

「懐ろのモノサシみんなちがつてる

という句を颯花坊が天位に抜いた。だが誰も名乗らない、それもそのはずその作者は若蛙だった。そのときの若蛙の複雑微妙な顔つきはみものだった由。

「颯師という人は、飲むとY談が得意の人で、東京へ遊びにいったとき、一席もったその余興の場で、ジャンケンがすんで——という上の句に下七のつけっこをやった。ABCがつけたが、最後に颯師がうまく仕上げた。つまり「ジャンケンがすんでふるえるさるぐつわ」というのがそれで、みんながさすは天下の颯花坊だわい、と大感服したね」これも柳陽青年の回顧談。まだある。井上

麟二がケツ作でね、と柳大人またしてもニヤニヤ。

「麟二は、有名な瀧児で至るところに彼女をこさえていたらしい。というのはだね、ある夜、久しぶりに奥さんと寝ていた。ところが柱時計がチンチンチンと長いこと十二時をうちはじめた。その音を夢うつつにきいてた彼、いきなりガバッと起き上がり、そのままつつ立ち上がって言うことがい。

「いかん、もう帰らにやあ」このばやきを耳にした奥さんが、

「一体、どこへ帰るんです？」ときょとんとしていう。ハッと気がついた彼氏、危く、ここはおれのうちだったのか、といいかけて口につた。まったく冷汗三斗だったといつたよ」

カラカラとそういつて笑う中野柳陽その人にも、とっておきの奇聞が一つある。

この人、生まれつき沢庵がゲゲゲより大きらい。血気にはやったこの人の青年期に、大連でにわか船員になっていたころ、仲間の一人がいたずら心を出して、めしの下に沢庵一切れを隠していた。いざ食べようとしてそれを見つけた青年柳陽、カッと頭へ血が上がつて、前でニヤつくその相手の顔へ、手近かにあった醬油びんを逆手に

とってガチンと一発。ひっくりかえった相手へさらにとびかかろうとしたが、居合わす仲間を押さえつけられ、とうとう、今にみとれ、というセリフで勘弁させられたが、相手はなぐられて、左眼を失明。ところが中野柳陽、そんなことに頓着なく、退院する日まで毎日病院に張り込んでいて、とうとう十余日ぶりに、さして相手をとつかまえた。そこで、また指一本をへし折ってやったそうだがこの柳陽センセ今もって沢庵はみただけでも全身にジンマシンが出るという。

まだまだ、大陸柳人奇談奇行のアラベスクは際限なくつづくわけだが、以上、中野柳陽懐旧談のウケウリで、文責すべて筆者にあることをつけ加えときます。

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



川柳明治百年 (三)

— 昭和篇 (川柳雑誌から) —

清水白柳

昭和十五年

我々が今食う米へ閣議也

豊葦原瑞穂国の七分搗き

買溜めるよりはと粥もうれしき日

阿部内閣総辞職

阿部さんは買溜めなども恨んでみ

新内閣成立

米内さん多く語らず陣を立て

支那中央政權

月満ちく／＼て生れ出ぬ悩み

イギリスの苦惱

老大家あの手この手を使い果て

浅間丸事件 米艦に臨検される

ほろ苦いお茶を船長のみ続け

大阪市電急行実施

傘さして急行時間けなすなり

毒まんじゅう事件

この粗品チフス入りとは書いてなし

布哇で日本語ニュース禁止

日本語も止すというのか米化論

路郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

外米

二千六百年あゝ外米を食へ慣れる

七・七禁令

七・七禁令奥様の変わりよう

切符制など泰然と老夫婦

釘買いに四十の男列に入り

近衛公に大命降下

おもむろに笏でまねいた組閣なり

第二次内閣誕生

近衛さん背負い直した重さなり

二度目には御下帯を締め給い

村田省蔵氏の鉄・連大臣を祝して

その船出けむりも見えず雲もなし

小林一三氏商相就任

風見章氏に贈る

頼むよと司法大臣磊落だ

日米関係悪化

日米の不戦信じた腰を据え

白・蘭・英・仏捕虜無数

祖国より俺が大切と捕虜になり

白面人

路郎

生々庵

白柳子

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

西園寺公を悼む

折も折大番頭に亡くなられ

巴里陥落に寄す

芸術の都おとぎの如く消え

翼賛体制

寺の庫裡新体制がしのびより

鶏骨一羽分五銭也

統制はかしわの骨にまで及び

オリンピックお流れ

五輪旗も真剣勝負へ近よれず

青少年義勇軍内原訓練所にて

松の木の彼方に小さく日輪舎

日独伊同盟

日・独・伊奇らば切るぞの構えなり

北白川宮永久王殿下戦死さる

日本の強さはここに有りと知る

昭和十六年

象の背に日の丸立ててわれ征かむ

南仏印進駐

水筒の水で猫にも似て洗ひ

前線

共々に明日は散る身のかくし芸

無事な日は馬の背にある鉄兜

日支資源凍結令

凍結令布哇の土となる覚悟

ツバメ号弁当携帯乗車

手弁当いらぬ遠慮と思へども

英米のなげき

持駒は知れず五・五・三か五か

路郎

白雨

生々庵

宏方

千斗

透水

満潮

一笑

静観堂

風来子

美知夫

アート

北海

普天

史路

平沼國務大臣狙撃

重臣の勞を謝さず何事ぞ

第三次近衛内閣總辭職

するだけはしたと荻外莊靜か

近衛前首相に贈る

明日からは少し朝寝もされよかし

近衛公桂冠の日

近衛公すなわち「夢」と書きのこし

東条内閣の誕生

寄らば斬るぞ東条英樹立ちあがり

ルーズヴェルトに贈る

会談へ日本刀がちらつかん

野村外相

見解の相違へ折れぬ巨体なり

時局私観

気兼ねしてゐては打水さへ出来ず

服脱いで我身にかへる軍需工

未入營補充兵教育

突撃の氣迫は先祖譲りなり

太平洋戦争勃発

モヤモヤがいちどに晴れたみことのり

米太平洋艦隊全滅

布哇では鳥が飛んでも眼をみはり

英東洋艦隊潰滅

死んだ子の年を数える英議會

すてつぺんも飛車と角行とをとられ

南海の歴史レパルス・ウエールズ

日・英米開戦

真珠湾・私も度胆抜かれたり

一億の日本刀が鞘走り

みことのりかしこむ民にわれもひとり

昭和十七年

大戦果

ハワイでは当て身マレーで面を採り

皇軍に太平洋がせまずすぎる

日本刀こうまで切れるとは知らず

マニラ陥つ(二月四日)

身代りの緋緘もなく西へ落ち

香港陥落

百年と云ふきつかけにけりがつき

「空の飯沼」マレーに散華す

神風の飯沼の死も決戦下

日・タイ攻守同盟成立

ビブ首相タイの歴史の人になり

シンガポール陥落(二月十五日)

陥落にジヨホール王も巾が利き

日の丸へ昭南島の風となり

陥落を祖母へも聞かすすまあげ

軍政が敷かれてトーマス用もなく

英首相張會報告演説

諦めの悪い繰りごとまだ続け

衣料切符制

花嫁が衣料切符で出来上り

オギヤーと生れりや百点当るなり

五十点切取り乍ら世辞になり

日仏共同防衛

スパイすることもされてることも知り

一日十日米潜艦我病院船撃沈

焼くそになつて赤子の手をもねじ

英米会議始まる

猫に鈴付ける鼠の智恵に似る

バタビヤも頼み甲斐ない内に落ち
ラングーン陥落

天兵を待つ釈迦牟尼の寝て在はす
軍神九勇士

九勇士ああ平和への切札か
落下傘部隊公表

スコールと別に天から兵が降り
米潜艦本土をうかがう

負けついで破れかぶれの王手と来
富田司政長官を返る

聖業に殉ずる決意海を起え
米機本土襲撃(四月一八日)

蠅どもに牛はまばたき一つせず
空襲へ咬え煙草を地にぶつけ

敬礼がつい商人の腰になり
満蒙開拓青少年義勇団出発

岸壁へしばし名残りの挙手の礼
海軍官階の大改正

変らぬは月月火水木金金
東条首相民情視察

街に出て光国公を思はせる
アリュシヤン上陸

ツンドラへ頼しく立つ靴の紐
米潜艦停戦輸送中のりすばん丸撃沈

大戦果あげたつもりも同志討ち

緑雨

史路

路郎

東魚

蛙柳

湧三

宏方

錦風

恒明

香林坊

宏方

可宵

富蘭

泉

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

飯住居

久松と云う柄でなく蔵に住み

煙草不足

手巻きとは云はずコロナの箱で吸い

東京裁判

市ヶ谷は王手王手で裁いてる

十一月三日憲法発布

玉音をしたしみ易く身に受けて

大阪市四組合争議

日曜のストを畑で暮す也

昭和二十二年

片山首相に捧ぐ

さあ動きまますと片山運転手

天皇を迎えて

未亡人として天皇へ涙ぐみ

二・一スト禁止さる

救世主神がかりでは出来ぬ業

停電しばしば

大晦日停電ですとは呑気だね

リントク流行

リントクに小豆の袋見破られ

丸公偏格

丸公と闇値二通の見積書

昭和二十三年

水谷商相に

坑内へ大臣いやだともいへず

芦田内閣へ

塗り替へた看板元の文字が読め

ガンジー暗殺

寒浪

潮花

角堂

香林

緑雨

路郎

路郎

路郎

悟志

鳥巢

白柳子

柳路

白柳子

柳路

柳路

柳路

柳路

柳路

白星

白星

白星

圭井堂

圭井堂

死花は咲けどインドよどこへ行く 史葉
王仁三郎は死んだガンジーは殺された 楽居

刻みばかりの配給

役所のと家のと煙管二つ持ち

北陸大震災

庭に寝て我家を怖いものに見る

帝銀事件

おやおやおれと平沢おない年

人相がほくろ一つで疑はれ

預金封鎖解除

政府もう財布の底を見透かして

サンマータム実施

サンマータムまたせはしない夕御飯

総選挙

一票が悲しき支配力を持ち

下山事件

他殺やろうといひくたばこまつけた

古橋渡米

よき友とロ市の水温君を待つ

七戦犯処刑

悟道とは南無阿弥陀仏と云う事か

ソ連引揚

友の遺骨さあ舞鶴だ舞鶴だ

専売公社となる

官吏と云う衣をぬぎはぬいだけど

皇居拝観

南瓜・ヒマ・甘藷宮城の焼跡よ

昭電疑獄おこる

あばくだけあばけ明るい世とならば

昭電疑獄おこる

あばくだけあばけ明るい世とならば

昭電疑獄おこる

老いらくの恋
ほゝえめばほゝえむ恋の川田順

昭和二十五年

陽川博士アメリカ行

ノーベル賞身近にあつた船出なり

買出し列車

腰かけりや隣の闇屋に叱られる

昭電事件以後

西尾からこつち大臣見くびられ

憲法発布記念日

基本的人権屋の風呂に居る

「きけわたつみの声」に

階級がちがい教師もなぐられる

路郎

路郎

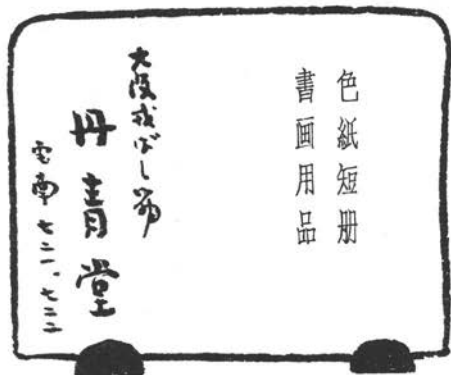
方正

普天

薺花

春巢

鮎美



シェーン台風
皮膚病の如くに瓦割がれたり

参議員選挙

「トラ大臣」天下晴れての杯を挙げ

「ああそれなのに」

米一升あゝそれなのに咎められ

豆秋
北海
聡夢

昭和二十六年

朝鮮戦争

良民の長い煙管で吸うとれず

シュール死す

その皮肉墓の中まで持って行き

競輪

酎を飲むだけを本命稼がせる

まだ未練あつて予想屋するつもり

ダレス氏来る

国民の希望靴にふくらまし

マ元帥帰国

日本を機上の元帥かへりみる

追放解除

大物へ敬遠と云う手で向い

追放解除ものと一徹者になり

大物のカムバックにはけむたがり

社会福祉協会の誕生

儲からぬ肩書また一つ増え

アナタハン島の白旗

けなげにもふんどしだけは白かった

ッ連平和案提出

拳骨で殴りその手で撫でられる

講和吉田全權

わが友とアメリカさんに云われたり

夕鐘
一草
路郎
同
蛙声
夜潮
路郎
同
摩太郎
文月
豆秋
小松園
夏六

白足袋も葉巻も君を待つ祖国

鈴木實徳監督

一将の辞表万卒手をつかね

昭和二十七年

日航機三原山で遭難

大空を飛べば日本も広い筈

社会党分裂

割つて見りや黄味が二つある卵

トッジ氏来朝

株価まで下げろと俺は言わなんだ

講和条約調印

無防備の一人歩きを案じられ

合成酒講和の春を酔い切れず

白足袋で押切るつもりぬかる路

街頭録音

再軍備もう懲りこりの声を出し

鳥取大火

どこに居た雀か焦土とんでおり

出せば出る力を火事に教えられ

焼落ちた土蔵の鍵を捨てかねて

大朝小説「めし」

芙美子さんめし炊きかけのままで逝き

家畜共済会

一等の牛らし寝るとこまで見られ

昭和二十八年

首相失言問題

馬鹿野郎が四百何十人も居り

人造米発売

カツギ屋に人造米をくさされる

水車
没食子

山雨楼

無骨

鈍玩

百郎

十九平

光郎

黒天子

美笑

日満

法泉子

良坊

奇童

豆秋

千舟

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五一—四

夜間 四四〇八

おいらは人造妻が出来るだろ

バンバン宿取り締まり

しどけなくオンリー寝床でガムを噛み

試験ばやり

ふぐ料理あんた試験を受けたんか

竹荘

昭和二十九年

監獄事件

ひそひそと隅で話せば汚職めき

あの人もやはりそうかとスキヤンダル

国会へ飛火それ消せそれ煽げ

ビキニ水爆第五福竜丸被災

ふぐよりも恐い鮎となりけり

自殺でもする気かマクロ買いにやり

保全経済会休業

一揺れで将棋倒しとなりけり

法律の路地を歩いた保全会

指揮権発動

後足で検察庁へ砂をかけ

成人

白柳子

満年

白柳子

天皇北海道へ

北の旅風の強さも身にしみん
カンカン帽振つて天皇気軽るなり

吉田首相外遊

高飛びのほかは術なき足袋を脱ぎ
その留守の破産倒産知らぬ顔

天主閣から飛び降り自殺

飛び降りるとは太閤も気がつかず

昭和三十年

鳩山内閣成立

それ以来中風の父も気が強し
吉田がやめても税務署は残り

武智郵政大臣落選

大臣が汚職の金に射落され

紫雲丸事件

嬉々として出でたる死出の旅衣

スト風景

委員長戦陣訓を読む如し

日ソ交渉

人質を取つて押売りする平和

ラジオいろいろ

また一つ雑音ふやしたお富さん

おくやみも言えないくせにウシユクダラ

まだ広い日本ラジオのたずね人

昭和三十一年

弥彦神社正月の惨事

人多く神威及ばぬ大惨事

石田一松逝く

あの世までマイク向けたしノンキ節

路郎	丁路	水客	白柳子	白柳子	あきら	花村	文庫	どんたく	雅堂	かつみ	一三夫	伍健
----	----	----	-----	-----	-----	----	----	------	----	-----	-----	----

M・Wが流行する

M過剰ビルWの母の気に入らず
ボデビルのW型Mにしてしまい

アルサロ出現

アルサロへ勤めに出して火をおこし

二大政党

小数党むくれにや損とばかり勘ね

織田作ブーム

織田作の話で更ける水都祭

三木武吉死す

大狸逝きてしよじよ寺の夏寂し

政治家は狸であつた惜しみよう

鳩山首相訪ソ

花道の出を待つ足袋がうすよこれ

自動販売器現わる

乗車券発売器へインテリの腕細し

山下清作品展

花火見る人は横向き後向き

太陽映画続々

ともかくも太陽映画また日のべ

スクーター流行

肉百匁持つて来るのにスクーター

昭和三十三年

神武景氣

神武以来がどうしたと言いがかり

御題「ともしび」

ともしびが夜霧にかすむ駐在所

国鉄に「特二」生まれる

落つかぬ特二社長の供をして

小林一三翁を悼む

節子	一水	潮花	没食子	路郎	どんたく	与根一	水客	一三夫	水客	沐天	文庫	路郎	史葉	方大
----	----	----	-----	----	------	-----	----	-----	----	----	----	----	----	----

宝塚葬送曲に春寒し

北川丸沈没

はしやいで出た旅遺骨で帰るなり

エレンプルグを聴く

通訳がハハハと一と足先き笑い

老齡年金案

大臣も俺と同額とは嬉し

健康保険引き上げ問題

一円のことと仁術折れ合えず

零号の割切つた意見を尊重し

零号夫人なるもの

零号の割切つた意見を尊重し

鼓風	宵明	一三夫	遠二	清生	栗
----	----	-----	----	----	---

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

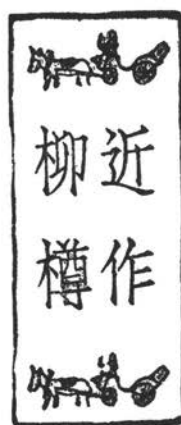
本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機株式会社食堂内

TEL 06 (991) 1181 内線 588



若本多久志選

姫路市 前田 芙巳代

個性なきキウリに春の音がない
一匹狼エゴの臭氣に酔うている
春の値札を見むきもしない寡婦
無造作に投げこまれたり納税書
昂りをしめせばイカレてるとも云う

倉敷市 藤井 春日

向老期鮎逆流の絵筆とり
行儀よく椿の花は自爆せり
白百合をよそ目に過ぎる夜の蝶
歌謡めく読経大学出たばかり

大洲市 堀内 曉風

読書にも煙草にも倦いて長い旅
呼び出され待たれ警察の堅い椅子
だた広い河原へ孤独持って来る
雲つかむ話をきくもお人好し

島根県 堀江 正朗

うたた寝の軀をテープに取られてた

生きる身の弱さ神様信じたし

見えぬのに春だ春だと血がたぎり

竹原市 三宅 不朽

落花舞うおくれ毛詫ること多し

あの時のおまえ泣いてたなあ雲よ

風に手をひかれて路次を白い杖

みずみずと眉よ唇哀れ痴女

鳥取県 鈴木 村瀧子

なぐる愛束縛という愛もあり

フェルトも靴も浮かれて春うらら

病人が白々しいと聞く見舞

泣き顔を拭いてと鏡なぐさめる

島根県 堀江 芳子

聞こえ過ぎても耳邪魔になり

過去遠く近くわたしをもて遊ぶ

青春よその青春は束の間の

ガム嚙んで引受けましたが氣にくわず

島根県 小 砂 白 汀

夢捨てた女のいびき不潔なり

十代の肢体が光るチューリップ

枯草と雪と寝た跡のこるなり

ライバルの小股搔くほど落ちぶれし

東大阪市 坂 東 若 芽

為せど成らぬ事もありけり爪をかむ

お祈りをして又冷戦がはじまりぬ

春風を鯉の口して吸うてみる

同情はしますと地代又値上げ

八尾市 高 杉 鬼 遊

燃える恋燃える不動へ水をかけ

友を呼ぶ手へタクシー寄って来る

始発には花屋の籠の春も乗り

鶏の歩み確かめて確かめて

広島県 岩 谷 二 三 枝

心なき妥協弱者の笛を吹く

泥中の虫の惘れに似るあがき

継ぎ足した夢に明日を温める

眉つよく引いて女は過去いわず

島根県 山 本 文 子

くすり指不安もいっしょに鉗めこまれ

ピンクカール巻けば明日への夢たのし

抱きしめてフト母性愛らしきもの

砂丘覆う雪風紋へ消えのこり

鳥取県 川 崎 秋 女

海猫も啼いて漁港に春が来る

時化の日の港漁船を抱いて寝る

孕ませた孕んだ話猫のこと

福耳と言われ不遇に堪えている

大阪市 小 谷 葉 子

沈思の夜 十字架の重み

たしかめに出る 愛の苦しみ

聞き流すほど女強く生き

哀愁をいやす桜の人となり

大阪市 江 城 功 雄

病絶つ刃物が欲しい日の焦り

真実一路行けば失うものばかり

ちぎれ雲追えば故郷へ続く道

大阪市 和 田 痴 亭

こけし買うこけしと視線合わしては

一生はもつ義歯入れて頑張る気

年のこと言うまいポロシャツよう似合い

長野市 森 本 黒 天 子

老夫婦墓の見本へ立止り

値切った植木へ鉢が高うつき

警察に惜しい桜の花盛り

宇部市 櫛 部 い さ 夢

童謡をうたわせ家の酒たのし

貯めるより地価先走り先走り

貧しさの中のしあわせ鯉のぼり

八尾市 宮 西 弥 生

あかぎれの手も寄り合うて趣味の会

谷川の流れに故郷を捨てた悔い

掌のぬくみへ変らぬ愛があり

姫路市 大久保 大夢子

老夫婦十四テレビへつつましく

わが家にピンクなしピンクの花を買う

郊外に非ず団地の箱に住み

羽咋市 三 宅 ろ 亭

録でなしとおれのどこかに叱る声

目に見えぬ糸がどうやらわかる歳

庭石にきいて職場の難を解き

下関市 志 賀 木 石

乳色の空へ亡き母呼んでみた

とっときの祝辞を先に人が述べ

十センチ伸びる予定の服を着せ

茨木市 吉 川 悦 子

霊柩車見れば死にたい気も消える

夫入院あそれからの早い事

偲ぶより語るよすがの欲しい今日

米子市 八 木 千 代

娘にすぎたむこと知りつつ物足りず

週刊紙母へ若さを補給する

銀婚へ曲りくねった道で着き

大阪市内 奥 川 継之助

妻の肩から春がこぼれそう

追伸と書いて本心のぞかせる

一瞬の憎悪へ菩提心が湧き

尼崎市 中 谷 利 美

かしわ手は無念無想の型でうち

八十と聞いて悔みも楽に言え

貰うよりましたと香簍包ませる

広島県 南 条 露 声

ポイントを何処においてもこんな顔

親の眼にみならしない子に育ち

春斗だ桜だ家計簿忙しい

竹原市 森 井 菁 居

かかる時月のまるさが慈愛めき

サキソホン悲しい時は泣けと言う

長 女 駄菓子屋の向きを知ってるベビー靴

大阪市 梅 園 摩 耶

春愁よわれ三十の妻なりき

目を閉ずれば雨ははたちの頃の音

愛憎の彼方へ流れ逆巻きて

出雲市 竹 内 李 朋

胎動よここから春の声がする

藍の墓ここにも春のプロローグ

いやーんばか三亀松三味を抱いて逝き

女下駄男がはいた音になり 花を見る女同士に酒がなく レース糸女の指へすなおなり	羽曳野市 中	高橋 鬼 焼
長雨をのんびりと見る療養所 軽るそうな石持って来て鳥の墓 十周忌貞女で通すつもりらし	大阪府 加	沢 風 太郎
勘忍が出来ず長い夜もてあまし 女房とふとん取りあう春の冷え 大掃除アルバムが出てお茶となり	八尾市 高	杉 千 歩
四十坂さかしさのみの女哀れ こざかしく弁ず女に一つ欠け 斗争の立看板に桜舞い	今治市 米	子 映 月
勝星へ髪の流れが気にならず 口下手でよし夫にもある長所 お隣りへ聞かしたくない声を立て	和歌山県 増	田 次 章
このままで良いとつくづく思える日 ぎりぎりの人生ブライド捨てきれず けちん坊を嗤った友に借りる金	愛媛郡 澄	本 満 子

不覚にも尾灯に涙見られたり 許してはくれぬ私を叱らない 告白をすれば理性がくずれそう	新居浜市 村	上 水 軍
新妻の迎えの笑顔傘の中 激流に磯香を乗せて暮る瀬戸 汚物拭く雑布でよし己が道	岡山市 行	吉 照 路
斗争のフラッシュ役員だけの顔 春休みステレオ酷使された音 留学の荷造りパパが買って出る	呉 市 横	田 英 詩
一泊の旅に夢あり手内職 弥次馬が見れば消防かっこよし 複々線空いた列車が抜いてゆく	米子市 林	瑞 枝
髪結うて女 女をとり戻し 転勤で別れた犬へ会いに行き すばらしさ信じて叱らず子を育て	大阪市 西	本 保 夫
住友のバッジにそわぬ臨時工 雑用を一手に引受け課長補佐 立候補した子の勇氣ほめてやり	鳥取市 有	田 とし 江
こまごまと就職をした子の便り		

病む夫とせめて花見を語り合
夫ときた山路に一人佇つ感傷

熊本市 高野昭三

猫の眼を野性に還す鯉節

お愛想のよさへひそかに身がまえる

叱られて叱られて尚パパが好き

大阪市 堀口欣一

同窓会借りのある顔一人いる

テレビ今際どこでコマーシャル

一族繁栄ソッポ向く一人

米子市 河瀬茂人

これも好きこれも好き母棺に入れ

庭の木瓜父の形見のように咲き

酒好きの父の位牌へ水の酌

竹原市 出島静波

人生の微分健康だけ残り

とまり木のそろそろ愚痴になり始め

出雲市 王紫

沈黙が金と傾く対話の間(ま)

心まで病むまい本復遅くとも

大阪市 大谷重夫

接吻のムード突然犬がほえ

喧嘩してお国訛まりでまくし立て

守口市 岸本豊平次

母の味に似た時ほめる妻の味

孫の守り愚痴も子守りの唄になり

大阪市 黒田真砂

京湯葉の単彩母がなつかしく

落葉たく煙の底に思慕を断つ

竹原市 岩本文晴

ちっばけな良心それをよう捨てず

国境いああ故郷に背を向けて

竹原市 生信笑子

たそがれて行く道私の影がない

くずれゆく夢と知ってて夢を追う

小松市 四方天弘美

感謝する合掌何時か利を願ひ

淡々と身上相談言い捨てて

竹原市 脇本政己

つらぬいた自我のおろかな影という

波紋さえ大きな方が勝ちのこり

堺市 斎藤亜也

婿えらび甘党なのを好感し

メンデルの法則祖父に似てる孫

大田市 藤田軒太楼

厚化粧噂さの中にいる女

失言の心の憂さの隙間から

河内長野市 小川耕人

花道のうしろ姿も芸となり

附添のママが胸張り入学す

大阪市 藤 田 頂留子

ふた親の期待も背負うランドセル
捨てられぬ見栄が暮しの張りになる

河内長野市 井 上 喜 醉

加減したのも知らず社長勝ち誇り

大阪弁上手く値切ったみやげ物
守口市 田 中 笑 風

妻の愚痴ブツブツ義父のことらしい

赤旗のかけに小さな急募ビラ
京都府 福 村 飛 龍

ほんとかと疑う脱税億がつき

みそ汁の味が違った旅の朝
高知県 山 川 勝 子

桜花酒飲みに来いとは言うとらず

葉ざくらになっても飲みたい人は来る

竹原市 時 広 一 路

渡る橋通る道まで金が入り

石垣の隙間に草は生きている
大阪市 田 中 多 幸

厄年の仏嫌いが珠数を借り

ホッチイチ思いのままに子は遊び
芦屋市 丸 川 愁 電 子

はら吹きがプランメーカーとも云われ

無実とは云うものの証拠なく

尼崎市 中 溪 慶 彦

手ぶらでは女歩けぬものと知り
退職金だけが頼りの椅子を降り

鳥取市 河 口 忠 志

報酬の値上げと野党拍手だけ

一流を目指すファイトが流す汗

鳥取市 谷 尾 透 風

合槌は打ってて話聞いて居ず

さりげなく仲人保険も勧めに来
鳥取市 藤 本 恵 子

嘘をつくのには神様までだまし

猫よりはましとはほめてくれたのか

鳥取市 藤 本 和 宏

金も地位もないが笑顔の父が好き

父の云う七人の敵見つからず

鳥取市 藤 本 鎮 也

慰めてくれた父の胸を恋い

コマージュ飲んで見て見とまだ売る気

兵庫県 不二本 和 久

良心が妻への土産買わせてる

悪い事みな運命にして耐える

鳥取市 藤 本 佳 女

模様変えやっぱりせまい部屋であり

腹へったおらは死んじまったと子は戻り

鳥根県 志 賀 美 栄

夜桜へ孤高の月の影寒し

腹いっぱいオゾンを吸った日は若く

羽曳野市 麻

野 幽 玄

明日ありと云うに桜は散りいそぎ

金策に來たのに風呂だやれ酒だ

泉佐野市 大

工 チ ヨ

指先の水のぬるみに春が来る

よもぎ餅作れど亡母の味が出ず

泉佐野市 大

工 静 子

生返事竹馬の友に溝があり

名前だけ交えてやり度いばけの花

下関市 和

泉 松 風

強情な妻の飼育へ五十年

アベックでおみくじ引いたのがご縁

東大阪市 竹

中 肖 二

夫の手を借りて結んだ五月帯

定まらない思案テレビを消しに立つ

尼崎市 平

井 露 芳

ばりばりと化纖電気を帯びて鳴き

廢物の火鉢ぬくぬく木が育ち

鳥取県 谷

無 閑

浮草の一夜向うの岸に咲き

臨終のうめき死にたくない瞳

善通寺市 伊

藤 歌 子

手も足も出ぬ相談を持って来る

春にそむきつづいて送る霊柩車

貝塚市 行 天 千 代

亡き母と同じ年なり落ちつかず

開店に呉れた花輪はとげが有り

出雲市 森

山 健 太 郎

兄嫁にだけは挨拶して帰り

ひた走る恋に思わぬ交差点

大和郡山市 中

内 孚 彦

歪みあってこそこの世おかしかり

勉強のよくする子痔がもうでてる

東大阪市 坂

上 山 椒 坊

つまみ食い胎教などと云っとれず

手の皺を知ってか梵鐘にぶく鳴り

鳥取市 小

林 由 多 香

医者の手が離れてたばこまた始め

伝言も聞いて預けた鍵もらう

七尾市 松

高 秀 峰

チャンネルをひねりかえてもプロ野球

聞いているとパチンコみんな儲けてい

堺市 羽

田 一 扇

笑顔からすんなりトゲのある言葉

チビッコになる日曜が待っている

高槻市 山

田 ス ミ 子

たこ焼がまだ人気よぶ春の風

裏切りの友さりげない顔で来る

松江市 村 松 醉 歩

犬の愛はげし女患に日が暮れる
若さ病むスード写真に求めたり

寝屋川市 福

盗難のついに乳母車まで及び
朝方の一句あたためうつうつと

鳥取市 近

春はよし今朝は若芽のおみおつけ
歩行不能の足生きていて疼く

伊丹市 貴

もの言えば指のダイヤが泣くセンス
クラス会出世頭が課長補佐

諫早市 原

入試発表悲喜別々の道を去に
共稼ぎやめると云えぬ弱味あり

鳥取県 中

二泊三日は乗りもので寝る予算
四才が歌うケメコにさからわず

新潟県 高

コマーシャル口ずさんでるのに気づき
京訛りいいけど湯豆腐あきました

京都市 藤

花便り落ちつけぬ性自省する
東大阪市 竹

仙台市 川

食欲が無いのにひげは早くのび

村	映	輝	中	綾	女	山	二	野	不	二	川	定	人	田	明	春	志	千	尋	藤	秋	星	富	隆	子
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

蕾でも咲いても葉でも飲めばよし
八幡浜市 平

藤井寺市 古

街の灯の流れに逆むく心有り

島根県 大

アベックへ犬も尾を振る散歩道

羽曳野市 樋

突然に話の主を連れ帰り

岡山県 目

日めくりの金言明治生きており

鳥取市 北

桜さくらさくらを賞でて妻とゆく

大阪市 塩

会議過多きようも課長がいないう席

竹原市 簗

桜散る地に伏せ今日を花に酔う

田	三	立	結	百	水	森	孝	華	口	一	峯	賀	芳	月	野	天	人	浜	一	路	田	浄	美
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



タチカワペン



優雅な書き味

秀句鑑賞

—前月号から—



後藤梅志

貧乏人の足音へ子猫ついてくる

(一三夫)

迷い猫と思われる。何処から出て来たか
れないが、ふと足許へまといつく子猫。そう
した感じである。

貧乏人の足音は、いつもせかせかして猫に
とって魅力もなさそうなのに、ついてくる。
迷い猫の心理は錯覚もあるが哀れである。

今の世の中は、少々の貯えがあっても「貧
乏人」であることにはかわりはない。何かしら
世の中に貧乏人も、子猫も追いつめられてい
るような感じに誘われる、心ひかれる句だ。

停年にならぬに銀行つきまとい

(紫香)

停年期が近づく、まだ停年でもないのに
銀行から呼び掛けがある。悪い気もしないの
で、フンフン云っておくと、また別の口から
も話がある。人の気も知らないで、腹の立ち

そんな時は会わずにおく。という話をよく聴く。

銀行の金庫には、巨額な退職金が退職されて
いるであろう。今日日本の貯蓄高は、列国の
国民貯蓄高の中でも最高位だそうだが、銀行
の数もズバぬけて多い。御堂筋なども、街角
は大銀行が軒を並べている。金の無い者には
ジャクの種だが、この句と思ひ合わせて面白
い。

春の酒また友人が一人増え

(一声)

「春の酒」というのは強がち、花見の酒と
は限らぬが、何かしらムードを伴いがちだ。
飲むほどに、酔うほどに互いに意気投合して、
身の上話ではじめ、急に親しさが増すとい
う事態によく出合う。酒なる哉である。

酒は、人間を本然性に返すものであり、男
が酒に親しみ勝ちなのも、当然の権利であろ
う。殊に「春の酒」は親しみがもてる。

ぼんやり「友人が一人増え」と云ったところ
にこの句のよさがあり、興趣を引き立てた。

あほやなと自分へ言つて悔しきり

(みよ)

口ほどにもなく、肝心なことを言い洩らし
たときに、出るつぶやきである。

かしこく、かしこく立ち回わっているよう
でも、人間というものは計算違いがおおい。
世の中に、バカに出来るバカは一人も居な
い。と同時に、自分が「誰れよりも劣る」と
いうわけのものでもない。

成功した時は、他人がバカに見え、失意の

時は他人がかしこく見える。有能な人ほど、
こんな傾向にあるのは味わうべきこと。

この句帰りのつぶやきか、おもしろい。

七転八倒 冷凍魚となり

(どんたく)

冷凍のさかなは、冷凍室に放り込まれると、
アツというまに凍結して了うものらしい。
市場でみる、遠海ものはみな、思い思いの
かたちで凍っているが、その魚達が、凍結す
る瞬間の姿を見た人は、無いであろう。

だから、この句は想像句だが、実によくそ
の瞬間のかたちを捉えていると思った。まだ
よく調べていないが、冷凍室のつめたさは、
想像に絶し、どんな大きな魚でも、生きたま
ま一分もたたぬ間に凍らせるものであろう。

「七転八倒」が実に面白くこれを捉えた。

化粧しても言いかと僕に聞くのなり

(蘭幸)

まことに正直な、こちよい句である。ひ
たむきな乙女の愛情は、ともすれば突飛な言
を吐くようになるが、少しも不自然で
はない。一つ一つ男の愛情を確かめるため
の、ささやきであって、男たるもののその愛情
に応える、頼母しい人であって欲しい。

明治時代の女性は、その愛情が純粹なるあ
まり、愛情が凝固して白髪が生えるようにな
っても、精神年齢は十六、七のところがある
子供っぽい女性があった。有難いことに、現
代はそんな女性はいない。

太陽はあるさもぐらの生活にも

(七面山)

もぐらもちは、太陽の光を浴びると、ひっくり返ってしまうという古老談がある。この句は、太陽の光の届かぬ下積みの人にも、太陽の光はさすことがあるという喩えに、逆説的にもぐらもちを持って来たものと思う。

太陽は、人間の生活には無くてはならぬものであるが、もぐらもちには、太陽は敵同士のような存在だ。どうも少し可笑しな話だが、その矛盾が可笑しくなく感じられるのは、これ即ち川柳の感覚というものであろうか。ユーモア味のある、面白い句である。

アルバイト人事課がまず美人とる

(清生)

アルバイトの人選には、人事課は、優先的に選択権をもつものか。こうしたことにも、女はまず美人でなければならぬという、社会通念が成立する。実のところ、人事課の女子職員は、お茶汲みを厭がるのでアルバイトをこれに当てようとする、横着な魂たんととれるが、社会の裏面はそうしたものであるらしい。何にしても、美人は徳をする一事にはかわりはない。人事課の横暴さをバク露したような句で、皮肉なところがある。

お芝居が上手政党座談会

(緑之助)

テレビ放送の座談会を見ると、政壇人といふものは、自分の党に有利なように、論旨をもって行く傾向がある。中間党と雖も、みな民衆に媚びるようなことを言うのを忘れない。つまり芝居をしているのである。国民の眼から見れば!!

座談会というものは、人間的にどこかが交流するものがあるのを、視聴者は期待するが、議会の蒸し返しのような座談会は鼻につく。だが、政壇人はお芝居が好きなのである。

葉牡丹は愛をつつんだように咲き

(一水)

葉牡丹は、葉が紫いろに互生し、茎を中心に、相抱く形からして一種の愛のシンボルのように見える。やがて淡紅色にかわり、牡丹の花をつくりであるために、葉牡丹と呼ばれる。この句の「愛をつつんだ」という形容は全くその通りなのである。

別に事新しい観察とも思えないが、床の間にこの花が座ると一家が春めいて来る。床の間の無い家では、この花の良さは味わえない。家族制度の良さも忘れられようとしているが、床の間と葉牡丹。温い感じだ。

党支部も吹雪 火鉢を囲む人

(万の)

「党支部も吹雪」と、火鉢を囲む人が、どんな関係にあるか知らないが、何か厳しいものを感じる。或いはあたたが、複雑な連想を伴うものであるからであろう。

日本の政党の地盤は、都会は革新。地方は保守的に、かたまっているように見えるが、いま世界的デモクラシーの中にあつて、旧来の日本を支えているものは、地方人士であると云つてよからう。何がなし、敗戦色のぬぐい切れないものがある日本は危なかし。

掃除機にしかられて立つ老夫婦

(道雄)

この句を見ると、この頃はどこでも掃除機に老人が悩まされている、不思議な世の中であることがわかる。この老夫婦は、家人に叱られているのではなく、掃除機自体の発する、あのジャージャーという怪音に叱られているような感じを味わっているものであろう。

文化が発達するのいいが、一律一遍倒では困る。少なくともあの掃除機などは、アパートかマンション向きと目覚めてもらいたい。

静閑な、屋敷町の住宅などでは、快い塵叩きの音が聞きたいものだ。

これでよし潮の満干に似た家計

(好郎)

月給で生活していた者が、月給から離れると途端に家計簿は狂ってくる。水風呂に漬ったような人も出来るし、家計の狂い通しの人もあるのである。月給は有難い!!と思う。この頃では、たとえ百万や二百万の貯金があったところで、貧乏人に変わりはない。駆けずり回って働かねば生きて行かれないのだ。

「潮の満干」とはよく云つた。まずまずの月もあれば、女房に不足を聞く月もあるというところであろう。ドカンと出れば、またジワジワはいつてくるということだろう。家計に不思議な安定がしてきたくことを云つたものか。人の恩恵をしまじ感謝する日もあろうし、老い先の案じられる日もある。人生というものは死ぬまで安心は出来っこない。

豊臣秀吉 (六)

富士野 鞍馬

千利久

大名の手せんじ利久させはじめ (三一六)
千利久は宗易といい、堺の人で茶道を武野
紹鷗に学び、千家流茶道の祖である。はじめ
信長に仕え、後秀吉に仕えて寵遇をうけた。

利久の娘へさる御方より文 (二四二二)

さる人がもす屋の後家に横恋慕 (二六二二)

利久の娘に綾という美人がいて、もす屋宗
安に嫁して後家となり、千家に帰っていたの
を、秀吉が見そめて所望したが、利久はそれ
を断わった。

時も時、利久は、自分の木像を刻ませて、
紫野大徳寺三門の上に据えてあったのが、秀
吉の目にとまり、

「高位貴人の通行する門の上に、おのれの
像を置くとは以ての外の潜上沙汰である、
不屈千万の至り、即座に切腹申し付ける。」
と厳命した。利久はそれをうけて、従容と自
刃したのである。時に天正十九年、七十一才
であった。川柳はそれを、

高あがりしたが茶人のおちどなり (安七二五)

利久が落度紫を茶にしすぎ

高見での見物茶人落度也

人を茶にして山門へ高あがり

桂馬と利久高上りして落度

茶人の親玉山門に高上り
などと詠んでいる。

(二五一)

(一九六)

(四四二三)

(二五三九)

(二六六二)

曾呂利新左衛門

曾呂利とよんで名の高い松の歌 (二二八五)
秀吉が大切にしていた松の木が枯れた時、
曾呂利新左衛門は、即座に、

御秘蔵の常盤の松は枯れにけり

己が齢を君にゆずりて

と詠んだので、秀吉の機嫌がなおったという
話がある。

曾呂利新左衛門は、泉州堺の鞘師で、天性
頓智頓才に富み、茶道、香道にも通じ、如何
なる難題に出会っても、即座に切りぬけて、
人の願いを解くので、秀吉の気に入る、始終
側に侍っていた。

きやつきやつと召すのにそりそり出る

(五〇一八)

曾呂利が話きやつきやつと笑ひ (三五二)
こそこそと知恵を出す新左衛門 (二三八三)
関白のおそばへそりそり出る (四〇三)
曾呂利そりりと笑せる呼子鳥 (八〇三)
関白をそりそり口車 (四六四)
ある時曾呂利は、秀吉に「紙袋一杯米を賜
わりたい」と願った。秀吉は「何よりやすい
ことだ」と許したので、大きな紙袋をこしら
えて米倉に被せた。という逸話がある。それ
も川柳に詠まれ、

秀吉も紙の袋にきもをけし

秀吉をそりとはめる紙袋

猿に袋をかぶせたは新左衛門

名将をはめるは知者のかん袋

名将をこつばりはめた米袋

名将をそりかぶせる紙袋

等の句がある。

(四一一)

(五一三三)

(七九二七)

(六六二二)

(二二二二)

(七九三)

またある時、秀吉が、黄金を取らそうとい
った。ところが曾呂利は「それよりも毎日君
の耳を嗅ぐことを許して頂きたい」といい、
秀吉は笑ってこれを許した。

それからは、大小名登城謁見の時、曾呂利
は、秀吉の耳元へ寄り、何かささやくように
見せたので、大小名は、自分のことを告げ口
されていると解し、曾呂利の私宅へいろいろ
の財宝を贈った。それで忽ち分限者になっ
た。という奇談がある。それが、

御耳へふれて町人金を溜め

約束で耳をねぶるがきつ知恵 (宝一〇)

と詠まれ、また尻をひって頭を叩かれ、

尻をひつて国二か国をもうけた

あたまはりまで屁がびつちゅう
と狂歌を詠んだのを、
屁を放れば屁をひつたとて歌をよみ（宝八）
と川柳になっている。

新左衛門袴を着ると膝つきり（宝一三）
いつも膝きりの袴をはいていたようである。
そして慶長八年になくなっていく。

鳴く螢

豊臣の螢紅葉の中で鳴き
秀吉ある時、
（四六七）

隠退か引退か

直原七面山

川柳界には、まだそんなに老いてもおらず
ピンピンしてゐるに、気分的に老い込んで
しまうのか、それとも他になにか重大な目的
があつてのことかは知らないが、ときどき隠
退声明をする人がある。

ところが面白いことに、そのままその人は
引込んでしまふのかと思つてみると、さに
あらずで、ものの半年も経たない中に、また
のこのこと出掛けて来て、前にも増した川柳
活動をやつてのけるのですから驚いてしま
います。

しかもそうした人々の中には、ときに、手
持ちの短冊や色紙などを全部柳友達に分ち与

奥山に紅葉ふみわけなく螢
と詠じたのに対し、細川幽齋が、
しかも見えぬともしびの影
と附けたという話がある。それをまた川柳は
下の句で御意の螢はひかるなり（三六七）
細川で泣いたはしかとせぬ螢（章の実切）
奥山の紅葉文武の猿と猿（二四六九）
と詠んでいる。

時鳥

また前に「時鳥」の兼題に、

え、柳社へは、自分の名前を冠したカップな
どを寄贈して、いとも花々しい隠退劇をおり
なす人もあります。

そこで後に残つた柳人達は、その人の功績
を讃え、表賞状や感謝状を捧げ、その上にな
がしかの記念品などを贈呈して、まことに劇
的な別離のシーンを繰りひろげます。

ところが前記のように、そのおやめになつ
た筈のお人が、そんなことがありましたた
け〃と言つたような顔付きで、シャーシャー
と川柳活動を再開するのですから、その心臓
の強さは、全く頭が下がつてしまいます。
文字に書いてはいないの、実はあれは、
隠退声明ではなくて、引退声明だったんだよ
と言われれば、ああそうですか、そんな理屈
も成り立つのかなと思うぐらゐのこと、そ
れを取り立てて、どうこう言う人も無いでし
よう。

鳴かぬなら殺してしまへ時鳥（信長）
鳴かぬなら鳴かせて見せう時鳥（秀吉）
鳴かぬなら鳴くまで待たう時鳥（家康）
と、各々三将の性格を詠んだと、これは作り
話だらうが伝えられていく。それで川柳も、
三将で思いおもひの時鳥（五三二）
大将の気性あらはすはとときす（五四三）
智仁勇三句に出来る時鳥（五六四）
御名句は啼まで待ん時鳥（四四九）
と詠んでいる。

そこでいろいろ辞書を探して、（もの好き
に）隠退と引退を引いて見るのですが、この
二つの言葉の意味に、そんなにきわだった違
いは見つかりません。

がまたもし仮りに、かなりの相違があつた
としても、隠退ではなく引退だったんだと言
つてのけられることは、どう言つてみても、
卑怯な言動と言う外ありません。

さて、こうした人が、私の知っているだけ
でも五人や六人ではありません。

が、隠退声明を出して、そのまま、文字ど
おり、川柳活動を停止された方がたった一人
だけあります。それはS氏です。

S氏は声明後間もなく、あの世へ旅立つて
ゆかれました。

ともあれ、実行出来ぬ隠退（引退）声明な
ど、口がきけても言わない方が、無難のよう
に思われてなりません。

白選百句

春の山煙まっすぐ立ちのぼり(処女作大正13年)
昇天の煙すなわち空の色

再会に互いの距離を知っただけ

ブラカードいっぶくするも街の角

真剣に日本語はなす孫の口

東京の孫江戸っ子で理屈言い

一点の目にも表情あるコケシ

山脈の向う側まで日本晴れ

発展のなるほど腰のひくい人

教典の字句のうまさに逆わず

庖丁を持った姿はやはり主婦

五寸釘節をつらぬく音を立て

政治家は遺憾ながらで済ませる気

角たててサアまいろうか蝸牛

春に手が届くところで風邪を引き

柳吹く風は西やら東やら

地階から五階へ抜けた春の風

見てもらう見せてもらうの通り抜け

客足を二つに分けた花ぐもり

長谷寺の牡丹で酔わず奈良へ行き

向日葵の孤高にそそぐ陽の苛烈

灯を消せばやはり団扇の風がよし

風鈴をうちわで鳴らしてみる暑さ

夏の夜を開けて寝られる家に住み

雨垂れの音が昼寝をながびかせ

あれぐらいならばとはいはる踊りの輪
夕立が晴れてさよなら言いなおし

台風が外れたと言っている小言

堤防を抑えたいほど雨が降り

今日も降る気の毒そうな雨の音

きりぎりす間を心得えて鳴き交し

仕舞いまで一気呵成に法師蟬

虫の身になって虫籠釣りなおし

夏の陽が赤いポストの色を焼き

こんばんは喉へ出かかるまるい月

菊一輪さして男の部屋にする

温室を出て花の名をみな忘れ

まだ温い夕刊配る桜橋

冬さえも明治はもっと寒かった

冬の波はつきりせよと磬を打つ

風邪を引く暇だけあった十二月

街の音ひとつずつ消え黄昏れる

児を抱いて毅然と歩道わたる母

通行の自由よ生命がけの道

死者零の日を不覚にも不思議がり

寝ながらにして絢爛と用を足す

マスクして理性のかった見舞客

批評家は鰯を崩して食う如し

女の児でもよいいと抱いてやる

四人目も女でしたと宮参り

昭和三十六年
骨折病床時



石倉旅風作品

人形の言葉がわかるおんなの児
阿呆らしい当て字も混ぜた女文字
本意なくも京の舞妓はおませもの
まだ帰えるほどには酔わぬ千鳥足
髭撫して策士孤独の酒に酔い
来なければこっちから行く飲み仲間
毒舌の味もたのしむ飲み仲間
西成に住んでいくらか染って居
見切品らしくは着せぬ歳の妻
ひよっとしたら世間の方が風変わり
親展とはじめて書いた娘の秘密
母親は候文でつつがなし
淀屋橋東西南北撮るところ
よく見ればいるいるあれもこれも亀
とつきのわるい男とうまが合い
行き暮れたところが宿の独り旅
独り旅夕陽に西をおしえられ
お互いの地位には触れぬ趣味の会
王義之は付たせ良寛黙らせる
道と名がつけばへの字もままならず
達筆な変態仮名は勘で読み
解らない洒落を苦笑で紛らわせ
恒産があつてスカッとせん男
曰く言い難いところを野暮に訊き
人触り良すぎて頼りない笑顔

（書道展）

八ッ橋を嚙んでいれ齒を試しけり
バックボーンカチンと音のせぬ堅さ
汽車ポッポローカル線が恋しなり
矢も楯もたまらずマニア持つて行き
僕とこを酒屋できいて来た気転
たばこ屋は癌になろうとなるまいと
メダルには目もくれずビリゴールイン
叱られている児の方にある理屈
恋愛を説いて才女に恋も無し
出直しの利かぬ床屋で漫画見る
気忙しい母親にする娘の魅力
氣に入った型に結べた帯の音
冷静を欠いてはすかし茶を啜る
位置かえて佇って見てみよ庭の石
刺立てて鉢のサボテン身構えず
一日をきっちり暮す老夫婦
老妻に石切さんへつかわされ
口先の嘘をよろこぶ暇が無し
灸据えてなおつかわんとする生命
伊勢海老のフライにならぬ面構え
真直にかけたら止る古時計
裏側を見せた孔雀の勘違い
古稀ちかく世故には疎く楷書かく
トボトボと歩けば鐘が鳴りそうな
順礼の明日はおわりの髭を剃る

句百選

風のうしろに立ってみたしと思う
じよろじよろと胡瓜がのびて雲の峰
北山杉ひときわ雨の音が過ぎ
鞍馬石 木立のしづくはるかなる
僧正ヶ谷 雨も寿永の色なるか
大手水鉢に沈み椿の紅おもし
散り椿 散りしく下は陽のかげり
梢うごいて緑りの粉が水にふる
飛石のおお 水照りに負けていず
万燈籠おぼろに闇を深くする
綿うすき布団 あま酒売る庭に
葉げいとう大寺の跡思わるる
三尊仏 大岩壁に陽を拒む
昔の人の足跡に重ねて歩く
掘り出した土の匂いに冬がいる
ストローへひとりの時間あり余り
女ありデマの大きさに負ける
いつからの不仲か犬を連れて出る
ええやないのと優越感すてず
心みせまいと口数を多くする
物干も春色うごくものを出し
かくし芸 左遷の人と思われず
暮れきってバスの運転手も話好き
人生をかける男の眼と思う
ひらひら泳いで生きているのを確かめてみたい

蛙の大合唱へ夕焼けが消えのこる
山の湯の朝 夕刊も添えてくる
くろうとで通る腕持つ気楽な身
ひとりの夜 寝巻のえりの糊をもむ
夏バテへじりじり砂がやけてくる
反感もあらわに眼鏡ふいている
二三日 旅に出てみる金詰り
焼跡の暗さは虫の鳴く広さ
脱ぎすてて旅の機嫌がまだ残り
鐘の鳴る方へ歩いて旅らしく
お気をつけてと銀行のドア閉まる
客が帰ってからテキパキと母うごく
見直しましたと問題にされていず
現金を包む手許のさりげなし
漬物をきざむ幸せ口にせず
銀婚の旅へ話題がなくてよし
溜息を聞いててくれる人がいず
不きげんな靴だと自分でも思う
幸せな人だと言う花便り
犬が死んだ日の雨を日記に書く
貧乏くさいことばかり選って言う
夕顔の種と袋に母の文字
泣けるだけ泣けと見詰めていてくれる
早咲きの萩がこぼれて人がいず
抜け道は八坂の塔の見えるとこ



正本水客作品

逆さ富士 旅情の底にゆれている
行けるときに行つとかなあと妻さそう
肩を打つ湯滝 瀬音が消えていた
灯台の白さに雲が突きささり
振向けば振向く人と知っている
靴あたまに雨を帰ってき
爪切っていて なかなか寝よとせず
返事も書かぬほどに自分の心が恐く
縋帯の手をちゆうちよなく水へつけ
エプロンの結んだ紐も妻の巾
雨の窓あけて見晴らし見せてくれ
木の芽和え 見渡す限り雨が降り
バラのとげ 雨の雫がまだ残り
莓つぶして愛されている自信
見晴らしへ蝶が一匹つきまとい
定年のそれからを男の花道とも思う
面影はまだ花につけ雨につけ
亡き母の帯で だんだん母に似る
不機嫌な肩を叩いて振り向かれ
天井に逃げて風船朝になり
小走りになって女に嘘がなし
待ちわびて一日ミシン踏み続け
格子開く音して暫く人が出ず
こけし作る家に生れて山おりず
夕映えのなかの一つになっている

川 海に入る広さ てんてん灯をともし
ハイという返事が笑顔になっている
見られてる意識ちいさくあくびする
出直してみるわと女に言い寄られ
靴みがき雲の高さを見ていない
不きげんな日をそこいらに猫がいず
二三日 猫の帰らぬことでもめ
次々と手頃な嘘を思いつき
幸せに馴れて此頃夢も見ず
急ぎ足できてスリッパを揃えとく
良縁と言われたことが気にさわり
窓から見えましたと扉あけてくれ
行きずりにやつれの眼立つ人であり
形勢不利へおばあちゃん寝るとする
口笛で夕立のなか帰ってき
要点だけ言えと話にのってくれ
口止めに戻ればビール抜いたとこ
差上げた子は太陽のなかにあり
窓ひとつひとつに人間がいるクレオン
風船を両手で割って夢がなし
鏡台の前のあぐらを邪魔がられ
手のひらで笹蟹の甲がもうかわき
こつんとした感じで蠅が顔にふれ
月の出へ石には石の影があり
玄関の暗さへ禅僧の顔が出る

句百選

気の長い恋にコーヒが二つ冷え
一杯のコーヒのうちは清い恋
二人来てふたりが帰える喫茶店
さよならを言わさぬための気をつかい
気苦労も女あるじの運命なら
侮られまいとマダムのゼスチュア
喫茶店春夏秋冬の長き
マダムとも呼ばれて小鳥ほど動き
傘借りに寄って呉れるも喫茶店
見たような客は背広のポリスさん
町内の義理に浸っているいで湯
連れと来てみてもところは独り旅
改札が行き先当てる顔馴染み
旅の町それも世帯の目で眺め
思い出になろうと嫁く娘旅に連れ
バスガイドこちらが名残り惜くなり
旅先でバーマネントの型を変え
方言を使う仲居で愛想好し
好き嫌いあって寂しい宿の膳
ふるさとの山が拭かせる汽車の窓
古里の土は足から胸に沁み
あつさりとブランを変え空模様
梅漬けを母に聞き度い里帰り
花見から帰り植木に水をやり
墓参りどこの花筒見ても春

インテリも大安にした結婚日
投げの手と決めて掴んだ波の花
こっちまでよろこぶ顔になつてくる
ひとしづく襟にかかった雨も春
手をかけた花が背中を見せて咲き
花咲いて政治の嘘が忘れられ
カーネーション買って帰れる娘に育ち
植木屋の負けないよさを買う夜店
植木屋で昨日の花の名をただし
春風に寝起きの頬をくすぐられ
聊かの信心あつての寺まいり
信心も季節に合うたとこへ行き
湯上りに丁度風鈴鳴りはじめ
三人へ傘二本貸す新世帯
油虫女世帯を脅かし
思い出はラジオオラスを抱いて逝き
思い出の季節は花におしえられ
しばらくはこのままいたい洗い髪
素晴らしやころを叩く俄雨
屋上はころっと変り南風
片づけた虫の荷解いて売って呉れ
盆踊り裸デンキを月と見て
食欲を気づかい合うて老夫婦
食欲を出させようとて食べてみせ
名月に邪魔な四角いビルディング



寺田花宵作品

もう鳴らぬ風の風鈴に秋の風
風邪引いてコロッと商売氣離れ
もやもやを通天閣へ置いて降り
温室の外で寒菊咲き誇り
手袋の左手だけがまた残り
忠臣蔵観にゆくほどの血は流れ
忠臣蔵泣くところでは泣いて観る
無駄なことひとつようせんのも哀れ
日本の空に日本の雲があり
さざれ石知らずに歌う君ケ代は
おたがいと思えど先に礼を言い
お互いの嘘を見抜いた瞳の笑顔
むつかしい顔していても上機嫌
裏切りも裏切られもせず歳をとり
曲り角まっすぐ行って突き当り
針と糸渡して母は目をこすり
花道を捕手で走る役がつき
あと書に一献とある会に出る
メロディが好きで歌っている軍歌
餌さ捨てて小鳥は籠を逃げてゆき
表札も定年という色になり
不器用な指に逆らう三の糸
音痴にも拍手があった小唄会
酒好きの博士すこしは飲めと言う
一方はいつも聞き手の飲み仲間

吹けば飛ぶもう粉なでないビルディング
お隣りの咳が聞える夜明け前
スピッツに腹の立つほど気を見られ
スパッツの顔色読んでから出掛け
笑わない客を気にしている落語
洗濯が気やすめになる女なる
限りある命を今日も割烹着
娘の寝顔いま叱られた顔で無し
霜枯れの鉢そのままの独り者
空想もまた楽しかり独り者
百貨店終業ベルで買うと決め
歳かいな暑さかいなの物忘れ
筆も句も石屋は好きになって彫り
愚痴言うておんなはすっとして帰り
孝行は法要をするばかりなり
出世する秘訣を読んで匙を投げ
一生の運を整形外科に賭け
二十坪買って私の土地に佇ち
しつけより先に小言が出てしま
うたがわず白衣の歌にそっと入れ
手をなめた犬を迷わず買うと決め
朝風呂の湯を熱くして初詣
レジスタンス休業の札かけて寝る
蕾から咲かせたバラを見てもらい
春に咲く花をわが手で咲かせた気

初歩教室

題 「土」

菊沢小松園

課願吟における題の範囲は各選者の意見や各地の慣習によって多少の相違はあるが、どう違っても一定の範囲を越えては題吟の意味はなさない。私も題はなるべく広く解釈はしているが、特に読みと断りのない限り、土の題に対して、土星や、土曜や、土壇場は遠慮したい。それは課題に対しての逸脱だからである。

借老同穴仲よく故郷の土になり
 故郷の丘もダンブの土となり
 これだけの土で花咲き実もならし
 土に生きた土を愛して嫁が来ず
 土を振る土は祖先の汗に見え

誓弘露三幸
 美声立多幸
 二美声立多幸

①夫婦仲よく故郷の土に埋られたということ平凡な理想である。だがこれだけを句にするにはもっと技巧が入る、出だしが立派過ぎてやや龍頭蛇尾に終わった感がある。③故郷もだんだん開発されて思ひ出の丘もダンブカーの暴力の前に削り取られて容れも変わった、淋しい感情もよく出てくる。④これだけの土がよく句に生命を吹き込んだ、生きた句語になつたその句のポイントになる句語を見出すこと

の重要さを教えている句だ。④農に生きる若い層の悩みを突いている、痛ましいこの問題も句になると綺麗だがなかなか為政者の頭痛の種だ。⑤土と汗は常套手段で誰でもすぐ思ひ当るところで損だといえる、祖先の汗も数多く見受けられた。

肩書を捨てて余生を土に生き
 一生を土に托した顔の皺
 赤土に骨を埋めた先覚者
 土地ブーム雑草生えるに任せたる
 土だけの土でも松が枝を張り

利同愁濁
 美電子水
 瑞枝

①徹めしい肩書を捨てて隠退の身を百姓になつて余生を送る、この人土に親んで初めて生甲斐を覚えたというところか、事の経過を親切に書き出している句だ。②苦勞の多かつた自然相手の仕事に一生を生き抜いて来た顔の皺悔のない働き通した顔が目につぶ落ちついた句境がよい。③先駆者の苦悩を手際よく纏め上げている赤土が印象にのこる。④金儲けには社会主義者であつてはならぬ、一般の人達が困つても値段が上がるばよい、一握りの人達の貪欲の前には雑草に任せた都会の中の空地がある。⑤世話の難かしい松の鉢植もその道の人に掛ればこれかと思うほど量の土で立派に生々繁茂する、丁度小資本で能率のよい利益を上げている経営者のように。

百姓の汗しつとりと土が吸い
 入植のついた土質も変えてのけ
 土いじりする日曜はおれのもの
 ハンケチに包んで帰る春の土
 土まみれ孫も結構負けていず

同葵同微
 代水也

①これも土と汗で常套という他ないやや中七のしつとりで救われたのが損。②入植の努力を自賛したのが拓植の土質の尋常でないのは多くの例で聞いているが、これは客土深

耕によって土質まで変えた辛苦に触れている
 ③ウイークデーに痛みつけられ怠倦を、せめて日曜は誰に気兼ねもなく俺のものとつた庶民の果敢なさも見えるが、結局底の浅いものである、あつさり詠んではいるが余韻のあるものになった。⑤結構という語句の持つならかさかこの句を生かした、句意は浅いが語句の持味の好例として取つた。

土の手で乳房ふくませ野良仕事
 土の香のし房みつけた手を恥とせず
 農に生く覚悟大地を踏んで立つ
 都会の子土の温かさを知らず
 赤土へ芝生早速売りに来る

秋同
 女一扇

①女である喜びも悲しみも乳の出ることに関係のあることが多くある、若い農婦の育児と労働と大抵のことではない野良に一瞬の家庭的な情趣を漂せるものこの句の場合であろう。②下五の力強さに引かれる、男優りの力強い作風はこの人の持ち味であるうか、何時も足許のしつかりした句を創る人だ。③この句も同様の型下五に力点をおいて全体を引き締めてい、どしどしした句の纏め方が覚悟の程を現わしている。④土の温かさはやはり地方育ちの人でなければ判らない、いわれて見て初めて気がつく程私達都会人には気がつかない仄かな人間味が泛つて快よい。⑤抜目のない商売人の激しい現実を感じさせる、生きて行く厳しさがひしひしと胸を打つ。

鍵ツ子の涙をここの土が知り
 何文あるかとダンブの土煙
 念願の大地の温みを手に触れる
 地下足袋の明日のくらしの土を取り

英同鉄
 詩舟

①いつも人知れず泣いている鍵ツ子の涙をこ

この団地の片隅の土は知っている、やや作意が勝ち過ぎてわざとらしさが難い。②車の側から見れば通行人が邪魔なのである、人と車が同じ路面を通るところに無理があるのかも知れない。③夢が実現した時、善良な人間の正直さは緊張のあとの解放から、無邪気な動作を見せる、それがこの句に見える。④庶民生活のよさ、気楽さを地下足袋を通じて夢と希望を詠い上げている、明日吹く風を信じてられる現実には幸である。⑤取るに足らぬ都会の庭にも春はやっばりやって来る、行き届いた造化の神への感謝の句であるが概念的な大ざっぱさは免れない。

植樹祭来賓の土は別にとり

保夫

箱庭の土を都会の子が囲み
麦踏みにひたすら祖先の土に生き

同 軒太楼

故郷の土が泌み込む荷が届き
運のいい土は練られて飾られる

同 同

①名士用としての土は別に取ってある、行き届いた観察がこの句を生んだ鋭い句だ。
②箱庭の土さえ珍らしい都会の土の哀歎が窺える。
③真正直に働く農夫の姿が出てくる。
④海のものが山のものが都会で働く子供への故郷からの送りのもの中七の描写がよい。
⑤陶磁器の置物か、同じ土でも飾られ拜さるものある上五の出がよかつた。

鉢植で都会小よな花咲かし
御先祖の土手離さぬ父の意地

頂留子

この土に先祖の汗も滲んでいる
少しずつ土を運んで来る人出

綾女

筍が土の匂を背負うて来る

比呂路

①僅かな土で咲いた小さな花でも生活の潤いにはなる。小さな花がよい。②土地の愛着は利害を離れたもの意地地ばかりではない。③浅いもつと具象化して鮮明にすること。④無

から有はない。少量でも数が寄れば相当になる。履物についた土に目をつけたところが面白い。⑤土の匂にうとい背負うという擬人法で救われた句になった。

一杯の土でアパート庭が出来
帰郷してまず土の香へ深呼吸

正朗

カタログの通りに咲かす土作り
啓蟄もすでに疲れた土の温し

同 芳子

①工夫次第で自然への接触のみちはある、一杯の土でも庭の気分は味える。②正直な叙法で好感は持てる故郷忘れ難く早々深く土の香へ親しみだ気分は判る。③兎角文字に頼る近代人の一面は突いて判る経験のない危なさがカタログの説明通りに頼っている様子が素人のよさを現わして面白い。④上五の許さ迎えての意味が深い、やはり何んな人も温かく迎えてくれる故郷は温かい。⑤土中の虫が地上へ出る頃それまでを育て上げた土もさぞ疲れただろうと、啓蟄の日の感懐が面白い。

停年を耕す土もなく迎え
泥りもせぬ土食うみみず嫌がられ

同 万竿

土忘れ人間性も忘れかけ
死線から故国の土へ還い上り

同 白汀子

①停年退職の日が来ても一面の耕す土地も持たぬ俸給生活の悲哀を現わしたが、ただそれだけのものに終った。②句材が弱いので浅さは免がれない器用に句にしただけに終った感

③やや理屈っぽい着目面白、遠慮したささやかな生活態度にも世間の冷たい目に遇う時もある。

午前二時土つけたまま三毛戻り
考古学土方と違う土を掘り

悦子

土塊をかかせる名器として残し

紫酒子

人生のたそがれ土に生くブラン
土蹴って見ても決断まだつかず
おんなじに施肥した土に出来不出来

同 美代

①思春期の猫に飼主も心配である、猫の午前様へ愛情が現われているのも微笑しい。②同じ動作でも目的が違っておれば目のつけどころは違う筈、土工と考古学の比較が面白い。佳句、③同じ土でも運不運の分れはこんなにも違ってくる、人生もまた同じことがいえ

④上五がよく利いた達者な詠法、余情もあっている。⑤石蹴って今振り返れば恋になる。を思い出した、これも余韻があつて佳句の部か。⑥同じ材料同じ手数も掛けても出来不出来があるところが面白いのだが、こうして見ると不合理にも思える、人材不如意の現れか。

一握りの土を抱いて引き抜かれ
七月二十日締切、九月号発表

選者吟

宛先「雨」
菊 沢 小 松 園

「川柳雑誌」バックナンパー。//川柳柳初篇研究」掲載
「川柳塔」バックナンパー。第二号から近刊まで。(創刊号は絶版)
須崎豆秋句集「ふるさと」掲載の「川柳塔」

路郎著「新川柳鑑賞」摩天郎著「堺の人々」蕙風著「れもん」ご愛読を乞う。

愛 称

野村岬月選

愛称がズバリの顔で振り向いた
愛称で呼んでももうて付もきき
大臣を愛称で呼び得意がり
愛称で呼ばれ嬉しいお国入り
ふと口に出た愛称の口をとし
Pちゃんも五つと三つの母となり
びつたりの愛称おしやまをにくめい
本名が思い出せないまま別れ
ひかるさんと呼んで本名知らぬ禿
愛称でよばれお使い頼まれる
愛称でよばれ拍手がどつと来る
愛称で呼ぶにはこわい犬になり
愛称をうかつに呼べぬ場所で会い
春の山二人の愛称がこだまする
愛称で呼べと不機嫌返事せず
愛称をその儘答える子等素直
愛称を金看板に流行る店
狛さんと呼ぶ駐在へ町平和
愛称で呼ばれていつも囃され
愛称を白木にするす犬の墓
愛称で呼ばれるほどに通いつめ
愛称で呼べばハッピーで返ってき

み 木 透 藤 祥 どん 芳 悦 勝 弘 白 百 葵 無 不 和 代 征 百 英 九
の 魚 風 波 月 たく 子 子 子 生 汀 水 水 聖 二 宏 仕 山 酒 子 平
くりくりの眼が愛称と好く似合い
愛称もつかぬ男でなじめず
愛称にふとふりむけば別の人
愛称の変わった頃の倦怠期
愛称でまだ呼び合える姉弟
愛称で呼ぶには恐い顔であり
愛称に戻る同窓会が沸き
愛称の由来を誰にも知らさない
七回忌まだ愛称で親しまれ
ふるさととはよし愛称で呼びとめる
愛称に背かず妻は呑気者
愛称で問えば交番すぐ分り
愛称で来る台風にあしらわれ
愛称のためらう程にたくましく
愛称の起源を説いて笑われる
何がそうさせるのか愛称まだつ
結婚してから愛称で遊びに来
佳
愛称の面影はなく禿げあがり
愛称で呼ばれ肩書など忘れ
愛称で呼んで妥協へ持つて行き
愛称では気のひけるほど引離れ
幼稚園バアチャン先生まだ勤め
本名は知らず愛称だけの仲
聖人と言う愛称に支えられ
愛称しか知らぬ近所の兄と遊び
人
出せぬ前の呼名で讃えられ
千 代

地 天 軸
愛称で呼ばれ寮母をまだ続け
愛称がもう届かないとこに住み
我慢する子を愛称が抱きしめる
コ－ヒ－
林 葵 丘 選
コ－ヒ－を飲んでハントのプラン練る
禁酒やなとコ－ヒ－でもてなされ
コ－ヒ－の助けもあり一夜づけ
コ－ヒ－は冷えて初心の恋する
農村もコ－ヒ－党がふえ始め
コ－ヒ－のおかわり言うほどの仲
コ－ヒ－が冷えて気が？四月馬鹿
コ－ヒ－をおどる嬉しいことが
コ－ヒ－の味が判って痩せている
コ－ヒ－のその誘惑にのるつもり
コ－ヒ－とケーキで意見聞かされる
コ－ヒ－で事たる純な恋ごころ
テレビの切れ目でコ－ヒ－干し
コ－ヒ－代惜んで練味噌臭くなり
コ－ヒ－をすすり移民の友思う
喫茶店コ－ヒ－だけしか知らぬ母
同
魚 山 庸 柳 豊 露 秋 千 古 千 惠 七 芳 綾 可 千 秋 素 大 江 宗 藤 公 十 無 庸 同
山 佑 平 次 声 月 翁 方 代 二 面 仙 女 住 翁 月 身 郎 秋 秋 郎 波 輔 九 閑 佑
い さ 夢 惠 二 朗 政 夫 トク子 藤 波 輔 十 九 平 無 閑 同 同

コーヒーでねばるお客の来々タイム
 掛茶屋で飲むコーヒーの水っぱさ
 コーヒーだけで別れた恋が忘れず
 銀行でコーヒーださせる程預け
 アリバイになるコーヒーの店に寄
 コーヒーのにがさ都会の裏を見る
 ちぐはぐな心コーヒー冷えたまま
 コーヒーの味をよくする巨匠の絵
 初恋はまずコーヒーでスタートし
 ホットコーヒー見合のどに引か
 マドロスのパイプがコーヒー自慢
 小言ききつつコーヒーかき混
 コーヒーをブラジル産と決めて
 コーヒー代貸せと不良にたから
 コーヒーでも飲ましようかと娘が誘
 サイフォンは戸棚に置いて儘の日々

佳
 コーヒーを疲れた顔へだしてやり
 マドロスが来るコーヒーの旨い店
 コーヒーの味はいうまい美人がい
 寂しさはコーヒーの中受験生
 責任を果してはととするコーヒ

人
 コーヒーの通にされてるベレー帽
 地
 コーヒーの香に原色の空と海
 天
 コーヒー通にきけばこんなある個性

無聖 曉風 一雲 木魚 頂留子 秋女 耕人 芳仙 千代 軒太楼 芳子 亭 七面山 七面山 弘生 弘生 富多葉 代仕男 素身郎 力 征山

伝説の海を翼船泡で消し
 伝説を秘めて毬藻の眠る湖
 伝説の沼青く青く青く
 伝説の井戸をのぞいてバス発車
 伝説の姫様みんな美人でい
 伝説のこけし土産に旅靴
 科学する子に伝説が腑におちず
 とかなんとか言うて伝説信じられ
 ローレイ伝説ラインの水豊か
 伝説の池底知れぬ青みおび
 雪女信じ恐れた幼い日
 天孫降臨日本の先祖は雲の上
 伝説を新しがり屋がまた叩き
 わらべ唄になって伝説生き続け
 伝説を信じたくなる蒼い淵
 伝説へ名菓元祖が差し向い
 ばあちゃんの伝説信じた顔で聞く
 名工の伝説知らず眠り猫
 民謡にのって伝説伝えられ

軸
 コーヒーを飲みつつ富士の上を過す

越智一水選

百酒 どんたく 同 同 可住 同 弘水 百水 弘朗 藤波 曉明 肖二 天人 英子 章雅 十九平 惠二朗 宵明 里風 惠子 和宏 和久

伝説はそんなうながもとで出来
 伝説に尾鰭をつけた観光地
 伝説を消してしまつた団地の灯
 養老の滝で値上げの酒を飲み
 伝説に養われてる古い寺
 味よりも伝説で売れている土産
 似たような伝説を聞く旅の宿
 伝説を聞いてボートは沖へ出ず
 伝説を脚色している観光課
 伝説へ理屈いいたい十八、九
 伝説へ後の方は信じない

佳
 伝説を気にもとめない二人づれ
 伝説の松へ建設省も折れ
 伝説の島底知れぬ沼をもち
 パンフレットの中で伝説巾をとり
 伝説を信じその夜は吊らぬ蚊帳
 伝説をうのみにするも旅なれや
 伝説を逆ろう人なく村平和
 按摩から聞く伝説も旅のこと
 島つなぐ橋へ伝説世に知られ

人
 隆子 いさ夢 秋月 忠志 双案 芳仙 素身郎 同 木魚 同 保夫

秋女 宵明 宵明

正誤—四月号胡蝶選天位を「コーラスへ今
 日成人の声はずむ惠二朗」と訂正します。

第二百三回（復活第八回）

大 萬 川 柳

「荷 札」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 五百八十三句
入選 五十三句

CMの方が立派な荷札つけ
界 草 春

田植え待つ故郷へ荷札書く飯場
界 笑 痴

荷札まつてキャンセル聞く電話
大 阪 滋 雀

転勤へ個数合せになる荷札
大 阪 金 三

彼の字も彼でないのもある荷札
豊 中 古 方

家中をひっくり返して書く荷札
宝 塚 ゆきを

鑑識に凱歌あがった荷札の字
藤井寺 吸 江

駅止めの荷札不気味な日を過し
下 関 不 水

荷札まで付けて日曜日だと気付く
門 真 鉄 児

もう一度荷札確め解く荷札
羽曳野 幽 玄

荷札にも本物が匂う蜜柑苗
倉 敷 三 林 坊

竹原 菁 居

ご無沙汰をわびる荷札をつけ終り
島 根 芳 子

着払い荷札は寮から汚れるもの
笠 岡 遠 二

裏は本人表は殿となる荷札
大 阪 真 砂

荷札つけ送り帰えしたい倦怠期
島 根 正 朗

嫁ぐ娘を受取人にして荷札
和 歌 山 公 作

借傘に荷札まで付けたまた忘れ
高 槻 静 馬

旅便りコケシは荷札にぶら下り
和 歌 山 守 夫

荷札曰く到着までの命です
大 阪 没 食 子

返品の管理荷札のままで積み
米 子 瑞 枝

初孫の名前も添えて荷札書く
弘 生

怒った父の手蹟のエフうれし
和 歌 山 葵 水

落しものエフついたまま貰って来

米子 千代

子と共に大海越えてゆく荷札
大 阪 庸 佑

早く解きたい荷物荷札が邪魔に
大 阪 阿 茶

うっかりと旧姓書いた荷札つけ
西 宮 多久志

荷札書き終え栄転の胸はずむ
大 阪 痴 亭

くにの餅荷札ちぎれるほど重し
大 阪 水 客

気心が知れて荷札の字を頼む
倉 敷 千 翁

中味などいわず荷札の子と話し
大 阪 旅 風

ふた親のある仕合せを書く荷札
大 阪 県 吉 郎

荷札だけつけ替ふローカー金どろ
豊 岡 和 久

筆無性子等への荷札だけは書き
鳥 取 佳 女

転宅の支度荷札もすんだお茶
大 阪 章 雅

單身赴任ひとりばち荷札解き
高 石 好 郎

荷札付け社長も手伝うている出荷
大 阪 弓 彦

荷札まで貰い団体やと発ち
大 阪 弓 彦

もう一度荷札引張り確める
大 阪 弓 彦

鳥取 日満

飲み助の父につけときたい荷札
倉 敷 素身郎

エフちぎり棄てて荷綱がまだ解
大 阪 美 房

取賄の動かぬ証拠となる荷札
大 阪 柳 志

円満に離婚荷札も書いてやり
大 阪 柳 志

荷札からはみ出しそうな母の文字
大 阪 柳 志

駅員は荷札見たよな見ないよな
大 阪 柳 志

佳 句
大 阪 弓 彦

税務署が荷札ジロリと見て入り
大 阪 柳 志

母の手と分る荷札で来た産衣
大 阪 柳 志

針金が要るので荷札ひきちぎり
大 阪 柳 志

時刻表キヤラメルピースエフも買
大 阪 柳 志

売店の善意荷札へベンも貸し
大 阪 柳 志

人ノ 句
大 阪 小 路

われものの荷札の方は妻が解き
大 阪 柳 志

地ノ 句
大 阪 柳 志

大萬ベストテン (五月現在)

(同点の場合は投句先着順)

一	文 秋	一七、五 大阪
二	素身 郎	一七、〇 倉敷
三	柳 志	一四、五 大阪
四	弓 彦	一四、〇 大阪
五	吸 江	一二、五 藤井寺
六	水 客	一〇、五 大阪

七	好 阿 郎	一〇、五 高石
八	清 人	九、五 大阪
九	十九 平	九、〇 岡山
十	きさ子	九、〇 岸和田
十一	十二 美房	九、〇 鳥取
十二	十四 千代	九、〇 大阪
十三		八、五 米子

十五	慶 彦	八、五 尼崎
十六	瑞 枝	八、〇 米子
十七	ゆきを	八、〇 宝塚
十八	鉄 児	七、五 門真
十九	静 馬	七、五 高槻
二十	千 波	七、五 大阪
二十一	翁 志	七、〇 倉敷
二十二	多 久志	七、〇 西宮

二一	光 道	七、〇 仙台
二二	代 男	七、〇 平田
二四	第十回「他人」	以下略
十一	一回「刺刀」	五句以内
十二	一回「五月」	六月二十日
十三	一回「五月」	七月二十日
十四	一回「五月」	八月二十日
十五	一回「五月」	九月二十日
十六	一回「五月」	十月二十日
十七	一回「五月」	十一月二十日
十八	一回「五月」	十二月二十日
十九	一回「五月」	一月二十日
二十	一回「五月」	二月二十日
二十一	一回「五月」	三月二十日
二十二	一回「五月」	四月二十日
二十三	一回「五月」	五月二十日
二十四	一回「五月」	六月二十日
二十五	一回「五月」	七月二十日
二十六	一回「五月」	八月二十日
二十七	一回「五月」	九月二十日
二十八	一回「五月」	十月二十日
二十九	一回「五月」	十一月二十日
三十	一回「五月」	十二月二十日

たましま大会余話

本田恵二朗

生々庵・好路宛に

二十七日夜はご招待下さいまし
有難う存じました。おとなしい
無口な男があれだけ喋ったのです
から腹の底から楽しかったにちが

いないと思つて頂きとう存じま
す。あれで二年は寿命が伸びたと
思います。五回やれば十年伸びる
計算になるなと思つたりしていま
す。楽しいだけでなく、幾分りこ
うにもなれますから一挙兩得とい
うことになります。

二十八日大会も百%楽しく、い
や九十%と申さねばなりません。
十九日に負けたことを十%位差引
かねばならないのを残念に思いま
す。
七月七日の路郎忌句会にはなん
とか参上したいものだと思つてお

雅号ぶっちゃけばなし (41)

き ゆ う



お お つ る

・大 鶴 喜 由・

大分県日出町の産で青雲の志を抱いて大阪へ出
奔、苦学力行二十才で薬剤師となる。
川柳を手染めたのが二十六才で導いてくれたのが市場没食子君
である。本名は「きよし」だが「きゆう」と号しそれから十数年
読む、作る、句会へ行くで夢中だった。気まぐれに、不老亭、小
雪で投吟した事もあったが、珍しい苗字なので見破れているよう
な気がしてやめてしまった。
雅号は苗字とつり合ったのがいい、雅号だけ見てもいいものであ
りた、呼称もいいひびきが欲しい。要するに自分の号をいいと
信ずることである。

わたしの歩んで来た道は「柳の窓」指田春彦先生「絵日傘」本
田溪坊先生「川柳雑誌」麻生路郎先生と師事して来たが、未だ
後世に残りそうな句は生れそうもない。
薬剤師 (六十七歳)

すばらしい
着心地

蝶 矢
シャツ

ります。泊りがけで行かねば本当
の味は味わえないぞと思つており
ます。目下保険の明細書に追われ
ていますが、それをかたづけたら
本気で計画します。五日はライオ
ンズ年次大会が岡山であり二千名
位集ってパレードをします。

柳 展 望 界

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼葭乃先生から「この間ア
ートが肋骨(軟骨)を折り
ヴァイオリン教室を一カ月
余り休みました。五月にな
ると奈良は新緑が滴るよう
になり藤も美しいので定期
を買って毎日人の行かぬと
ころを散歩したらと思わぬ
でもありませんが、まだま
だしたい事が一杯で時間が
足らぬ現状で、毎日の時間
割を造っている程です。」
▼青森県川柳社創立二十周
年記念川柳大会は昭和四十
三年九月二十二日午前十時
から、青森市市民会館日本
間で開催。兼題は、カラス
・坐る・のれん・生き抜く
・ビール・親友・伸びる・
旅路・踊る・縫う・林檎、
投句は各題三句百五十円同
封して(発表誌希望者は更

幹の祝辞を白柳氏が代読さ
れた。
▼堺市文化団体連絡協議会
川柳部門の理事に梶川雄次
郎、西村左久良、八木摩天
郎、和海岸春、吉岡青香、
新谷笑痴、青野遊仙諸氏が
選出された。
▼堺、若芽川柳会(天位入
選句を毎月堺市役所前のア
トラスへ提出。なお、堺川
柳会と若芽川柳会が合同し
て白柳、好郎、摩太郎諸氏
が指導にあたられる。
▼辻圭水氏(堺同人)の新
住所は大阪府堺市榎元町二
丁一三三、郵便番号五九
〇。
▼川柳たましま十周年記念
大会は中島生々庵主幹を迎
えて四月二十八日玉島農協
組合館で開催、百三十六名
の出席で盛会であった。川
村好郎氏の柳語も満場を唖
らせた。知事賓は西山寛子
さん。なおこれに関連した
お便りをたくさんいただい
た。本田恵二朗、浜田久米
雄、田中好啓臣諸氏ほか。
▼川柳きやり五月号は「村
田周魚思い出号」とし発行
事を申し添えます。

時 六月十三日(木)	所 呼鈴・集める・中毒 堺市九間町山ノ口筋 八木摩太郎宅
時 六月十日(月)	所 玉造交差点 南一〇〇米 大阪信用金庫
時 六月十日(月)	所 玉造川柳会(大阪市)

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
多々薬品



アリナミンA

▼川岡靈眼子氏(諱早同人)
は四月二十七日から三日間

こおろぎ橋、芭蕉堂の新緑
に心を洗われた。

霊学講演に福岡市へ。諱早
川柳会では、島田破竹、江
副竹亭、庄司万象、大崎筆
染の諸氏を幹事に会の発展
を期されている。

▼藤本礎山氏(鳥取市同人)

は三月末、琴桜閣大関昇進
相撲の記念会を興業される
ことに決定、半月程は目の
回る忙しさであったと。

▼山上千太郎氏(小松市)

は四月二十五日山中温泉た
わらやで清遊、折りからの
北鉄ストのため閑静な白鷺
湯に浸り、鶴山溪の遊歩道

▼阿倍佐保蘭氏(東京都)
は五月十九日、さあやろう
会の誕生記念川柳会を開催
されたが、ご令息の結婚式
などで疲労が重なり静養の
ため入院待機中とのこと。

「六十一まだ情熱は燃えに
る」

新同人紹介

川 端 柳 子

— 恵二朗・十九平推薦 —

松 下 梁 水

— 恵二朗・十九平推薦 —

池 田 あ や 子

— 恵二朗・十九平推薦 —

燃え」の路郎先生の句に叱
咤される思いですと。

▼桂枝太郎師(東京都)の
高座を聴く会は、関西川柳
懇話会有志により四月二十
四日千日劇場で。本社から
白柳、すゝむ両氏と薫風が
参加。夜は師匠を開んで松
本波郎・増井不二也・海士
天樹・河相すゝむの諸氏が
薫風居で欲談した。

▼本多柳志氏(大阪市同人)
から、「文豪藤村の遺跡を
見に木曾路へ来ました。馬
籠旧本陣跡や藤村記念館を
見て百年の時代の推移に感
慨を新らたにしています
」

「舟速し左右の夏山去来す
る」

▼山田季賛氏(高槻市同人)
は、四月に入り胃腸病を統
発、天王寺鉄道病院でのレ
ントゲン検査の結果はたい
したことなくまずまずで、
早速十六日大阪美術館へ第
八回日本南画院展を鑑賞に
行き、直原玉青先生の絵に
感嘆された。五月三日には
信貴山下の竜田川平群石灰
神社参拝、正光寺の深井凡
々氏の奥さんから故路郎先

生の話聞きなつかしかつ
たとのこと。

北海道・青森の激震地へ
お見舞い申しあげます。

故 松江梅里一周年追悼句会

日時	六月二十日(木) 午後六時
会場	大 萬 (阿倍野区松崎町三ノ一〇)
電話	(六二三) 五〇三一・五〇三二番
挨拶	中 島 生々庵
兼題	「気前」 「客足」 「女」 「命」
席題	二題(題と選者は当日発表)
会費	各題天位に梅里遺墨(短冊)呈す 大萬川柳(貞操) 当日入選発表 百五十円(投句だけは三十円)
投句先	大阪市生野区北生野町一ノ二五
主催	金井文秋宛
後援	南大阪川柳会 川柳塔社

時	南海川柳会
題	六月二十日(木) 午後六時
所	保養所・先入観・ ナニバ高架下 親和クラブ

川柳塔社五月句会

— 六日六時

— 会場 自安寺

ゴールデン・ウィークあけの句会だけにちよっと心配だった。だが結果的には例月どりの出席数に達したことはありがたかった。

戸田古方氏の柳話は、氏の独壇上である仏教と歴史を中心に、人間はなぜ二本の足を立つか、ということからはじまり、氏の作品を通じて太平洋戦争当時の為政者を語り、浄土真宗親鸞聖人の教えの真髓を伝える「歎異抄」から人間を追求された。

五月の句会賞は二ホーマーをぶつとばした藤岡花梢さんが獲得された。

前月にひきつづき女流作家がカップを手にしたのは句会史はじめてのことだった。出席者四人に一人が女流作家という異色句会に、万丈の気をはかれた花梢さんに拍手がしきり鳴りやまなかった。

(河井庸佑整理)

出席 県吉郎・与呂志・双楽・笛生・静馬・一三夫・武助・照一・貞山・白柳・瓢太・花梢・葛城・滋雀・弓彦・肖二・いさむ・鳥莊・古方・痴亭・柳宏子・生々庵・静歩・好郎・文秋・多蘭子・一扇・形水・天樹・華江・きさ子・柳志・喜恵・芙巳代・綾女・笑痴・金三・トメ子・操子・幸代・鶴声・三喜造・多久志・頂留子・千梢・六童子・庸佑・野迷路・宣介・具里院・恒明・吸江・舟遊・季

賛・奈良子・柳太・誓二・凡九郎・弥生・あいき・葉子

席題「朝寝」

児島与呂志選

もう昼に近い不浄へ立つ寝巻きたまきさかの朝寝を起てす電話ベル満ち足りた日曜の朝寝を大あくびいけげん起きなはれやとばやか朝寝しても食事だけは三度する休日にかぎって親父早よう起き起こして母ヒステリックな声に日曜にかぎり朝寝の出来ぬ子等共稼ぎ朝寝の夫をおいて出る朝寝して来たと思妻の旅帰る台所の音うつうつと聞く朝寝朝寝したバジャマへ長距離かけて麦踏んで帰って来たにまだ寝て朝寝してスラム明日は明日の風朝寝とはしむじみ楽し旅の宿二日酔た寝かしといたれ父の愛朝寝した分だけ気嫌のよい陽気

男ありけり禁煙を無視しての禁煙ヘパイプのみやげ負けかきやめてから灰皿汚いものに見え

白千柳 静馬 樹選

席題「禁煙」

海士天樹選

禁煙に踏みさる意志をためさる禁煙は夫唱婦随とまでゆかず禁煙のつもりへ罪なパチンコ屋経験があります禁煙うけつけず禁煙の嘘を見えいた聴診器禁煙の札あり重要文化財禁煙をしてから父のさびしそ禁煙をどこ吹く風とスラックス命には変えられませぬ煙草やめ禁煙はチンピラ目の目にうけない禁煙の苦しみの紫煙に負けそう禁煙ヘハラハラさせる客が来る禁煙の目に休そくの多い事禁煙の嘘虚しいく渦を巻き憲法記念日禁煙の字が小さいぞ禁煙が最後の一本から崩れ禁煙は甘くみられていたクラス車内禁煙僕も私も未成年ですたばこやめてよかった黒ビールをたばこやめてからしやべること多き値上げした禁煙に禁煙した記憶昨日から禁煙ライターが承知せず禁煙の文字愛煙家に赤い禁煙の夫の肩をせめて揉み肺病が怖い禁煙につききそう背信のつぐない禁煙せがまれない闇に浮く禁煙の赤放れない

若人義理を説いてもピンとこず仲人へ義理の年賀はもう来ない義理堅いけれど融通利かぬ人義理で始め最後は負けてなるものか

トメ子 多蘭子 静馬 生々庵 小川恒明選

席題「義理」

小川恒明選

兼題「ハイミス」 宮口笛生選

母代りのハイミスそろそろ邪魔に
熟れ切っているハイミスの孤独感
はめられた体格ハイミス気に入ら
整形をしてハイミスの株をあげ
親切のかけらでハイミス勘繰られ
ハイミスの装い造花の美にも似て
独身寮ハイミスカラーテレビ握え
火ともえるハイミス明日の陽を戻す
安売も出来ず話がもう来ない
ハイミスをとうと片輪にしてしま
ハイミスとなつてネクタイ選つて
ハイミスに新春の文字まぼしき
ふり向くハイミスうっさ笑くが見
新入社員を目をハイミスが意識する
ハイミスが幅を利かしている人事

芳久良
千山
磯公輔
春日水
百雅樹
章樹馬
一天屬
靜靜屬
靜靜屬
生々座
与志助
武呂佐
季替

兼題「山」

ねむそうな山を蒲団に京の春
新緑の山へエレキのうさ晴らし
ワンダフル言いそこねたの曇り富士
山と山またいだ虹の美しさ
祥月

直原玉青著

創元社出版

「新しい南画と

俳画の描き方

本社でも取次ぎいたします。

ブラジル

川柳社に寄せる

吉田 水車

全ブラジル川柳大会が日伯毎日新聞社主催
ブラジル川柳社後援によって昨年九月南米サ
ンパウロに於て挙行された。祝吟を送って置
いた処「ブラジル川柳」の大会特集号を送つ
て来られた。通覧してその大会の盛況であつ
たことがしのべられた。

実は私は海外の柳誌を手にしたのはこれが
初めである。遠く海外で祖国に思いをはせな
がら川柳の十七音字に托して、逞しい開拓意
欲をいやが上にも燃し続けて居られる姿が仿
彿する。この大会で入選の三光句の中から少
しく紹介すると、(発表紙の通り)

海渡る茶毘にふさわし異国妻
結局は我が影のみがなぐさめる
芸のない石漬物の味を生み
母の胸男四十も泣けるとこ
身を飾る心の仕度まだ出来ず
人間を色分けにした神の過誤
夢抱いて移民安住の墓碑となる
洗つても移つてもよれる掌
本心に目をつぶらしている揉手
三代の箸を明るくつつき合ひ
以上はほんの一例である。

ちよつと一筆

小川 静観堂

若造、不二田先生へ一筆啓上。若造なんて
無茶をいうおやじとお叱りあるな。所謂、社

会的にも、物質的にも、年齢的にも私は先輩
とおもうのでお許しください。但し川柳では
あなたが先輩とおもいますから先生と書いた
のです。お許しを乞う。

私、八十歳です。昭和十三年に蒙羅張家口
で路郎先生に始めてお目にかかり、翌年また
満洲でお目にかかり、それからというものの路
郎先生を通じて川柳に憑かれました。然し生
来の愚鈍には全く駄目です。川柳塔には三、
四句抜かれ、時にコピッドクやつつけられ
：呵々。まあこんなヤカラです。

路郎先生の川柳は「人生批判」「社会批判」
の詩だの、さらに「人間陶冶の詩」だのは耳
にタコの出来るほどきかされてようわかつて
います。だがわかつていながらそれが実現さ
れないのが辛いのです。若造先生!!!なんと
かいままへんか!!

興にまかせて、いやーっばいやってホロー
ッとしたとき手帳に書きとめたヤツを翌日見
てみるとソナナアホナコト……いやになりま
す。これが八十翁の日々です。そのうち十句
ばかり川柳塔へ出出すと三句か高々四句、
お情さけにのせていただいています。ようわ
かっています。然しそれで結構たのしいです

息子はネ。おとうさんもう二十年生きてい
てくださいと言います。それはいま私に死な
れると相続税にエライコト取られるからだと
言います。これも川柳の題材ですな。十年生
きのびたとして、吉田茂氏のように国葬にして
もらえんワケでもなし呵々。

いつ死んでもだんないけれども十年
孫は四月に小学校二年生になりました。目
に寝かせても可愛い初孫です。よくおんぶし
て寝かせたものです。

おんぶされた写真に苦笑 孫二年

蝶も舞いトンボも飛んでる 孫二年

小川静観堂先生へ

お手紙かと思いましたが原稿でした。いき
なり若造、と目にとびこんできたので、どえ
らくお叱りをうけるのかと度胸をすえて拝読
しました。正直いって、はめられることはメ
ッたにありませんが、お叱りを受けることは
一手に引き受けておりますので、さほどビク
ともいたしません。いきなり若造とはうれ
しいですね。ただ、タイトルが「不二田一三
夫先生」は氣にいらしません。ここだけ、ちょ
っと一筆手を入れました。

路郎先生も、生々庵先生も、また静観堂先
生も、この若造に勝てないことが一つありま
すね。これはどうアガいてみても勝てません
ね。私にはね、ことし中学二年の孫がおりま
す。いかがですか。孫だけは私が先輩です。
静観堂先生が軍医大佐で、ご尊父が刀圭界
の泰斗であることも路郎先生からうかがって
おりました。

いっでしたか、

「同じ伊丹市の作家で、自分とまったく同じ
句を出している人がある、不思議なことだ」
と聞いてお問ひ合わせをいただきましたね。
アレ、ほんとうは静観堂先生ご自身が「近作
柳樽」へご投句なさった作品なのです。編集
部としては同人欄と近作柳樽欄の両方へ発表
できず、ワザと私が雅号だけ書きかえて出
したものののです。だから句がまったく同じだ
とおっしゃるのは、別に不思議でもナンでも
なく、あなたが自身の句なのです。すみませ
んでした。(不二田一三夫)



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

ボタン掛け直し焼香へ向きなおり
作業服揃わぬ鉦気にしてず
人間国宝小先だけでない音色
誤解したままで孤独の殻にいる
胸さわぎあれが汚職になろうか
咳一つ兼ねているクラシック
ボタン一つつけてもくれず妬み
誤解せんといてと女身を守り
まっ暗な目先を妻に支えられ
綴り方胸締めつけた母想い
クラシック解らぬめでアンコール
誤解して帰した夜の寝つかれず
誤解とけて元の刺激のない夫婦
くるくると目先変えては流行ら
針差しのボタン半パのものばかり
弁解がうとましくなる程誤解され
進学の不安にいたむ小さい胸
末吉を信じ目先へ眼をつぶる
目先きく男儲けて蒸発し
クラシック意味さく解らず好き
人恋しクラシックでも聞いてみる
小手先の職へ一家を背負わされ

滋雀 柳宏子 好松園 恒明彦 弓舟 生江 吸三喜 県吉造 金三郎 綾あいき 千文 双古 肖古 智喜 風子 二方 案梢 秋女

胸の内言葉にならず仰ぐ空
言わさず悟って欲しい胸の内
だるまさん胸に一物ある構え
誤解とくための仕草を誤解され
誤解して気を利かしてつもら
クラシックもエレキも現代っ子

玉造川柳会 (大阪市) 西出一栄報

借金払わずこっそり貯めており
ひな壇の五人ばやしある個性
甘酒に酔った子ゴーリ踊って
カルピスでひなまつりする
古代びな旧家の奥のほの暗し
春うらら小川に足をひたす恋
農協へ出荷を急ぐ葉を洗
近道は小川の中へジャンプする
給料はみな小つかいという身分
小遣いの値上げへ母を味方にし
金持ちの小遣いほどで四苦八苦
お小遣持たせて寺など芝居など
平仮名のあめがむあめの小遣帳
里帰り内緒の小遣娘にもたせ
月初めから小遣いが無い若さ
入れて呉れとと小遣いを見財布
やりくりへ子の小遣いも借りて
くすぐったい思い小遣親にやり
実現に遠い話に酔うている
実現をさせ後輩に道ゆける
実現性なければ夢を子にもたせ
して見せる実現させた若い意気
酒やめた動機を聞きに来るばん屋
くだい程動機を聞きに来るばん屋
動機などないが禁酒も年のせい
病みつきは大穴当ててからのこと
どん底をなめた動機で立ち直り

馬馬 静雅 若芽 庸佑 喜仙 頂留子 鬼歩 静女子 綾柳 小白路 小金水 形中 静馬 好平 井ね 誓二 文秋 智子 順三 柳宏子 義介 頂留子 千梢 大康 肖二 貞山

知り合った動機を妻と笑いあい
むらくも川柳会
藤井明朗報
六竜子

上品な和服姿へ向い風
上品な血筋糸図に縁がなし
奥さんの奥の手里へ帰ります
減税の奥の手値上げで見透かされ
言訳の奥の手妻のせいに
先輩の奥さん奥の手まで教え
勝った気をどたん場奥の手にや
お茶一つ遠慮するのもお上品
奥の手を始めて出して後がなし
母一人子一人卒業へ涙ぐみ

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

眼に見えぬ檻に入ってわれも猿
ボス猿のように一度はなりたいた
食糧難猿日溜りで会議中
成人式終えて一票我れにあり
人の世の中にも猿の尻笑
母性愛猿の母子に負けかかり
アメリカの猿真似ばかり先進国
草履から日本一の猿になり
土一升金一升でも鬼門さけ
宇宙船ソ連アメリカ鬼ごっこ
繁栄の陰に護国の鬼ありて
偶然の見合にするも母の知恵
偶然に通り合せたように逢い
偶然に友も彼氏が好きだった
偶然のような顔して彼女と会い
三文の小説偶然積み重ね
偶然に今日もあの子と乗り合せ
偶然に会いたさバスをやりすごし
立話し子供も合の手入れている

桂馬 良章 秋春 八郎 影正 良丸 桂治 風太 桂馬 一太郎 夕子 夕子 酔し 九郎 八郎 山郎

孝華 美子 芝郎 正郎 白郎 比郎 明郎

子が生まれ亭主仕事の鬼になり
拾得物心の鬼が出入する
かくれんぼ可愛い鬼が立たされる
思わざる再会月が明るすぎ

あすなる川柳会

(大阪市)

川村好郎報

こたつから立ったついでを頼ま
本宅のこたつ布団の色もあせ
隅っこが素人ばなれの芸を見せ
あかぎれの母にすまない水の音
あかぎれの晩酌やさしく飲んで
あかぎれの手に惚れ込んだのも昔

どんぐり川柳会

(大阪市)

川村好郎報

受話器から動悸聞えるほど慌て
心臓がおどる留守居の不意の客
心臓に負けて保険が一つ増え
うしろ影おろがむほどの恩でなし
乳飲ます妻は聖母の影のよう
夜深くドキッとさせるベルが鳴り
プロポーズさせる予感で燃える胸
心臓が止りまっせと子を叱り
としよりの心臓満員客救せず
名曲を思わすような心電図
心臓の寄贈約して長生きし
まだ一駅あるのに煙りを出す心臓
心臓と血圧云うて父の酒
心臓に苔を生やしてすねてみる
大臣へ心臓えぐる釘をさし
心臓のぶりに過去を思い出し
さすが上司心臓の強さを見逃さず
心臓の限界ゴール前の顔
心臓は大したものやと見下げられ
心臓に悪いといえは外で飲み

清水
桂馬
好わを
郎

素彦
弓彦
ゆきを
慶助
好郎

史好
真好
吸江
静波
輝宇
鬼遊
雪貞
比呂
重歩
白扇
敏雄
泉吉
功水
桂馬
生雄
長峯

心臓強う値切ればあつさりま
心臓と口の旨さにまた借られ
あれこれと迷う買わずに去め心臓
心臓は強いんだと手術に行った
心臓が弱っているとふすま越し
無い影をわざと作って化粧出来
五十年歩んだ我が影細りゆく
もう一度というから貸してや
動き抑えて前夜の星を見て居たり
思われてロソクの灯に影があり
ここが心臓と貸付けへまだねばり

まるべに川柳会

(大阪市)

川村好郎報

玄関で失礼靴下破れてい
シムレスの破れ気づかぬ足組
試験場またおしっこがしたくなり
ふるさとはいいな訛りも気にな
国なまりそこはかとなく人の味
悩んだ試験に子供も又悩み
ことごとくすべり予備校もすべり

大鉄川柳京都北野神社観梅吟行

友情を言葉の端にあふれさせ
設計図二人の夢も織り込まれ
機関車の旅路をここに現せ
ささげの梅雪チラチラと遠慮せず
華道展流儀わからぬ儘にたつ
機関車の型の古さに湧く郷愁
分臭図の端で湧いてるお温泉好
立読みの人にくすくす笑うてる
浪人も二年立読み励まされ
進学の祈願雪が気にならず
若い庵主の設計壇家の気に入らず

幽風
喜生
草春
凡太
痴亭
稔章
良子
青柳
白風
好郎

立見
泉睦
瓢太
益清
幸子
好郎

水門
卯客
宗悟
季笑
尚女
杜高
一溪
万子

川柳たましま報

水粉千翁報

魂のカケラに自首をうながされ
素顔のシンボルに妻の低い鼻
入れ替のきく魂で頼りない
魂としての鏡をけがされず
ガラス張りだからこゝろ来た二人
平凡にふくらむ歌のあるくら
魂のカケラで綴る獄舎の詩
ガラス玉真珠になった夢がさめ
貧しくも心の晴着忘れまい
おめでとそれが診察結果です
閉された心に愛が明滅し
情性から脱けたいガラス試みて
ガラス越しにも新任にアダムつき
明滅へ本物らしいイヤリング
希望またふくらむ恩師と曲角
決心をして明滅の星に向き
愛の明滅胸の灯濃く淡く
高笑いの背中であつた日の誤算
水くきの嘘すらすらすらと美しい
やばり嘘だったかと門灯を消す
希望大きく明滅の中にいる
灯しかり消したり男迷うとき
ゴミ捨場ガラスの意地が陽をはく
洪水の春だふくらむマンモス校
明滅のネオン邪恋の炎で揺らぎ

高知川柳社

(高知市)

川竹松風報

買物に先ず相談をする財布
不気嫌は妻の財布の軽い時
ヘソクリを入れた財布を持ち歩き
虎の子の最後の金を出す財布
公園も散歩の犬へ札が立ち

扇承
簡平
柳枝
千翁
三林
旭峯
秀子
好啓
梁水
簡風
里翁
柳風
旭峯
三林
寛草
林鶴
朝二
豊水
扇水

勝子
蟠蛇
文春
白浦

一竹未夢松桂紅一天美た百鯨伊
歩莊遂迎風緑雨人花知かし紅洋津志

若芽川柳会（堺市）吉岡青香報

白流た笑青好徳六遊信藻千狂季暁摩双
柳月つお痴香郎子仙天翁介子二替年郎楽

堺川柳会（堺市）和海草春報

摩花德信静宏好百笑青遊六文千耕武都天白痴双曉
郎梢子翁馬子郎水痴香仙秋月子人笑柳亭樂年

南海電鉄川柳会

貴和東金圭草宏
山郎雲樓三水春子

ワイロー社（ハワイ）若本多久志報

奥の手もインスタントで伝授され 紅 溪

紅峯　エス　魔　拝　よ　浮　三　泉　カ　曉　柳　快　嶽　朝　蒼　あ　内
茶　円　子　花　山　し　草　石　水　ロ　女　舟　葉　起　風　海　蛇　樓　坊　海

大鉄川柳会
辻白溪子報

杜季三美水求白実宗耕永
的賛求穂客女_溪子男悟三断

川柳たけはら学生卒業記念 静水報

春風の中にもゆる望みあり 浩

振りかえる妻の目春の柄をより
り帰り客あつたにの発てペル
ローカル線忘れ頃の夜さて
波一つ一線に春陽照りはじめ
エリートを目ざす深夜の灯をと
自信満満みゆくり開けて見せ
友文で嘆く輪へ少し刺激され
作文で僕他人と区別して話す
君と僕他人と区別して話す
ブライドのこもる愛の喝く時
哀痛のこもる年功序列なり
今日も雪昨日も雪で飲んぢず
泣いている人もあろう幾万の灯
一周忌亡母は晩かあふ
まだ嫁にぬすは置いて出る
来る家に娘も室を空けて待つ
主人には内緒にしとくお買ひ物
五十の坂へいたわり合う気持
電話線離島を結ぶ声と声
思い出を胸に誰にも負けません
貴男だけ頼りにしてるとおだて
硯箱とじるに惜しい夜のしじま
素直さがはいり話がまたこじれ
抱負語る時の瞳がきれい
信頼の微笑フایت湧いて来た

以上学生

芳一蘭不菁峰静こ房凡澄そのルイ笑松柳康草扇延操よし英清太鬼
則路幸動居泉水ふみ子女のみ子風漁人水子子恵詩海郎焼

ふじかけ短詩睦会

藤本礎山報

夢さつてうとうと居るあなたも新入生
新入生ひよこのようにふかたまった
新入生次第にくずれるマイペース
新入生親めいて登校の日々となる
新入生集めしつゝに目ざし
新入生さて今日からは負けられず
新入生ピンからキリがまだ知れず
新入生皆僕よりは出来そうなる
新入へ繰出て買ったランドセル
仰げばと別れてすぐに新入生
ひよこの両手で追ひ込む新入生
新入生ひよこのように落着かず
新入生もう大学の顔になり
新入生注意も添えてプレゼント

以上小

嬉し泣きの涙が新入生送り
新入生ユニバステイに通う顔
先輩が少々こわい新入生
旧友へ又逢う手と手新入生
新入生結構他府県寄って居り

醉甦天紫真政不靜笹文雅靜
石苑
舟光庵莊好己朽火舟晴風波

一清英照千中光 and 惠敬千久保美喬良実佐婦勲香
代久子夫重中学生子宏子子美天代枝知子美子繪

新人生迎えるクラブがごていねい
旧友の手を握り合う新人生
旧人生肩張り大学の門くぐる
祖母も出て来て気づかう新人生
待望の大学今日から新人生
ライバルが早や出来ている新人生
先輩へお見知りねがる新人生
制服の新入りの頃懐かしみ
天国か地獄か大学新人生
新人生生先ず顔ぶれを探り合い
新人生はじめて真面目に帰って来
新人生校門くぐるリズムカル
新人生聴講席がなじめない
新人生エンブラデモは仕て呉れない
新人生ママも行こうと駄々をこね
仏壇の母へも知らず新人生
新人生旧友も居た酒を酌み
新人生髭の生えるのもまじり
倅いっぱい新人生の子を迎え
懐かしいものにあの頃新人生
新人生七年振りを酌み交し
新人生みんなで先生うけ合い
お君も居たかと抱き合う新人生
帽と服ニーで新人生とわかり
新人生裏に秘密をもつのも居
今亡き子新人生の歳とならぬ
新人生スタート凜々しい顔で待ち
新人生最後の四年に挑む顔
逝った娘へ新人生が目立ち過ぎ

秋田実主宰・不二田一三夫編集

はじめて出る
漫才の機関誌
「漫才」
創刊号
六月中旬
漫才作家の登竜門（送料共）百三十五円

礎和征長鎮佳克忠大多利透喜千吉十広照富明富喜加政秀ノ和泰長總
治鶴 鶴 三
山久山男也女秋志郎子風美子春子司夫子 夫久代子雄子枝嗣男

白柳作品

佐藤正敏

清水白柳氏の自選百句熟読いたしました。
このくらい句が並ぶと、その作家の体臭が鮮明に出るので鑑賞の仕甲斐があります。
退屈は煙の消えるまで見つめ
雨の音二階を降りずひるになり
荷を挽いて真昼の汗が地に泌みる
ピラを読みつくして電車まだ来ない
淡雪は老舗の灯りつけさせる

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 若本多久志選
課題吟 (各題5句以内)

「有名」 大山雅城選
「葉」 今西章雅選
「夕涼み」 大江秋月選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。
文字は楷書で新かなづかいにしてください。

うっかりと元の値段でつりを待ち
大臣の花輪は色のあせるまで
夜警して霧の重さを身に感じ
人妻のあわれや小さいいびきかく
貧乏を子供心に苦にしてず
などいいと思いました。
白柳さんの真髓は軽味にあると思ってい
ましたが矢張りそうでした。ずっと読んでい
ると時々古川柳を読んでいるような気もしい
ではありませんが、それだけにどの句も含蓄
のあるものばかりです。
私は最近川柳というものは伝統をしっか
り踏まえての新しさでなければという感を深
くしています。私は川柳は結局人間の俗性を
否定してしまつては成り立たないと思ってい

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 若本多久志選
課題吟 (各題5句以内)

「ラッシュ」 村上旭童選
「少女」 菱田満秋選
「皿」 青木遊星選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま
す。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

暑中広告

本年も「暑中広告」によりしく
ご協力たまわりますようお願い申
しあげます。
左のスペースが二百円。本誌五
分の一段が千円です。
幾口でも結構です。

川柳雑誌改題

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

★原稿締切・六月末日

す。ただ新しさへの突破口としてそれを心理
的に彫り下げてみようと思つてやって来たの
ですが、近頃の新しい人の川柳なるものを見
ていると、どうしても反発を感じてしまいま
す。
やはり私の血の中に伝統が流れているから
でしょう。
型式の問題などいくら議論してみても平行
線に終るのですから、それはそういうゆき方
として認めるとしても、川柳は単的にいって
人間の生活感情であるということ忘れては
ならないと思います。
なかなか若い人に川柳というものを教える
ということがむづかしくなつて来ました。
「川柳研究幹事」

うまさの敵「シブ」を追放

〈生きた味〉
アサヒビール

★今月かぎりて千日前の句会場とも当分のお別れである。都市計画により自安寺が道頓堀附近へ移るからである。

★七月七日の路郎忌からかつての光明寺で本社句会を催すことになった。すこし足場が不便になるが、緑樹にかこまれた庭園美など、風趣ひとしお作句また楽しんである。

★川柳塔（同人作品）の五句組は、ほとんど毎月同じ顔ぶれではないか。近作柳樹のトップクラスは女流作家ばかりではなはいかーというようなコトがどこからともなく耳へ

★あの選者はうまい、この選者はまずい、といううようなカゲのことは、句会などでも耳にすることがあるが、けっきょくは、自句をよくとってくれる人は名選者で、その逆の場合は迷選者ということになる。そうである。

★近作柳樺の場合、たしかに最近の女流作家はみえなくなまいとおもふ。まず内容の新鮮さはうちの女たちは抜群である。各社ともに女流作家が伸びてきたことは事実で、もともと女性はいっぱい

をよく作句上に生かしているか。という見方はどうだろうか。

★オレは二十年やっていて、三十年やっていて、というようなこともよく聞くが、もう今の時代は実力で勝負をしないとドンデんふり落とされていくのではないか。これが作家の宿命だ。

☆台本の読み会の会が週に一回ある。ここでは作家歴など全然問題にせず、力と力のぶつつけ合っている。このきびしさや作句上に生かせば、ぼくの川柳もすしは向上するのだろうか……

(不三田三夫)

定価 百四十円（送料六円）
 半年分 八百七十円（送料共
 一年分 千六百八十円（送料負担）
 昭和四十四年五月二十五日印刷
 昭和四十四年六月一日発行
 編集兼
 発行人 中 島 蓬 太 郎
 印刷所 大陽印刷株式会社
 郵便番号 五四二
 大阪市南区豊中町の二〇番地
 発行所 川 柳 塔 社
 電話大阪・二七一一三九八五番
 振替口座大阪・三三三六八番

川柳塔六月句会

日時 六月七日(金) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
(電話211・1478番)

兼題 柳話
「腕ずく」 辻白溪子選
「雑念」 橘高薫風選
「メガホン」 本多柳志選
「見せ場」 市場没食子選

席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪 ㊦ 3985 番

★投句だけの方は切手五十円封入

川 柳 塔 柳 篴

一冊 65円・送料35円

お買物は近鉄へ！

楽しい



アベノ・上六
近鉄

戎橋
大阪

星極北 くに輝く味



宴会のお問合せは (640) 1275-7

戎橋

北極星

(611)

三三三
五五五
七七七

味堂やわらぎ ②一五三

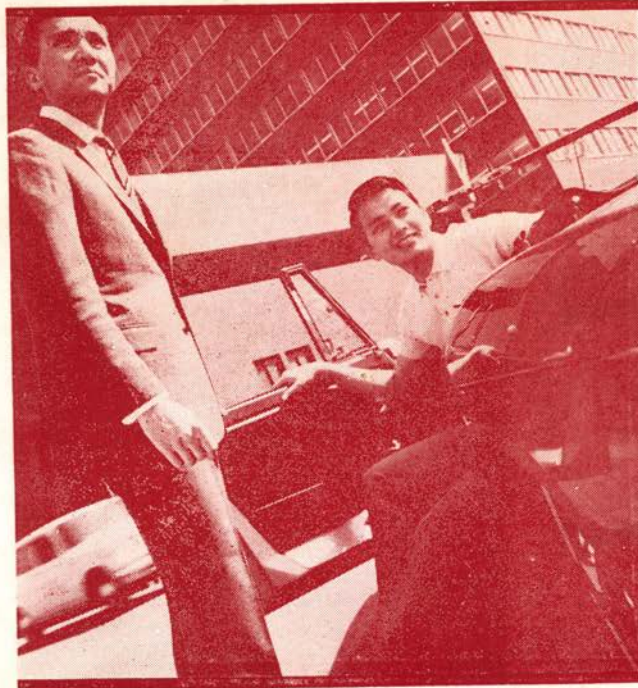
結婚式場 やわらぎ殿 五北極階星

曾根崎 北極星北店 ③七五

永楽橋 やわらぎ ⑤七六

野田阪神 別館やわらぎ ⑥六二

野田阪神 パンヤの食堂 ⑦四八



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。

その秘密は、東レテロン®— 激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レテロン® (ポリエステル) 100%

オルテロン

スーツ・スラックス

TORAY 東洋レーヨン株式会社